YUN-KANG

CAVE FIVE

VOLUME II

TEXT

8691834209
京都大学文学部

PUBLICATION OF THE JIMBUNKAGAKU KENKYŪSHO

YUN-KANG

THE BUDDHIST CAVE-TEMPLES OF THE FIFTH CENTURY A. D. IN NORTH CHINA

DETAILED REPORT OF THE ARCHAEOLOGICAL SURVEY CARRIED OUT BY THE MISSION OF THE TŌHŌBUNKA KENKYŪSHO 1938—45

PROFESSOR SEIICHI MIZUNO
AND
PROFESSOR TOSHIO NAGAHIRO

VOLUME II
CAVE FIVE
TEXT

JIMBUNKAGAKU KENKYUSHO
KYOTO UNIVERSITY
MCMLV

京都大學人文科學研究所研究報告

雲岡石窟

西暦五世紀における中國北部佛教窟院の考古學的調査報告

東方文化研究所調査

昭和十三年——昭和二十年

水野清一

長廣敏雄

第二卷

第五洞本文

京都大學人文科學研究所

1955

例　　言

本書は『雲岡石窟』全十五巻のうち第二巻にあたり，第五洞の調査と研究をまとめたものである。

第五洞は，主として昭和十三年(1938)，もと所員羽舘易氏が，現國立東京博物館技手米田太三郎氏を助手として撮影した。測量は，同年(1938)，水野が現國立奈良博物館技官小野勝年氏の助力をえておこなったが，翌十四年(1939)若干の補足をおこなった。拓本は昭和十三年(1938)徐立信氏によって作製された。

本書の記述は著者二人の共同執筆であり，英文飜譯はオックスフォゥド大學東洋美術館 P. C. Swann 氏の手になる。

本書の刊行は，本所の出版費をもととし，文部省當局および京都大學の特別の配慮のもとに達成されたものである。

以上の諸氏ならびに諸機關に對し，心から感謝の辭をさゝげるとともに，過去十數年間の調査と研究に有形，無形さまざまの援助をあたへられた數多くの人々に對し，さらに本卷の編輯に獻身的努力をはらはれた齋藤菊太郎，陳顯明，助手岡崎敬の諸氏，およびタィプラィタァの勞を擔當された川合スミ子孃に對し，深甚の謝意を表したい。

1955年3月

著　　者

目　　次

例　言 …… vii

序　章　雲岡石佛寺 …… 1

第一章　外壁 …… 9

第二章　南壁と東西壁 …… 13

第三章　北壁 天井 隊道 …… 17

第四章　第五洞外窟龕 …… 20

1. 第五A洞 …… 20

2. 第五B洞 …… 21

3. 第五a-d龕 …… 24

4. 第二段石窟 …… 25

5. 第五洞東方石窟 …… 26

終　章　第五洞の特徴 …… 27

圖版解説第五洞 …… 31

石佛古寺 …… 31

第五洞 …… 32

第五洞外窟龕 …… 40

附　錄　雲岡金石錄 …… 卷末

實 測 圖 目 次

參照頁

I. 第五洞 橫斷面圖 (水野清一測, 高柳重雄製圖) 11

II. 第五洞 縱斷面圖 (水野清一測, 高柳重雄製圖) 11, 18

III. 第五洞 門口 東西壁 立面圖 (岡崎卯一測, 高柳重雄製圖) 13

IV. 第五洞 南壁 立面圖 (水野清一測, 高柳重雄製圖) 15

V. 第五洞 東壁 立面圖 (水野清一測, 高柳重雄製圖) 16

VI. 第五洞 西壁 立面圖 (水野清一測, 高柳重雄製圖) 17

VII. 第五洞 北壁 立面圖 (水野清一測, 高柳重雄製圖) 18

VIII. 第五A洞 實測圖 (水野清一測, 高柳重雄製圖) 20, 21

A) 外壁　B) 橫斷面

IX. 第五A洞 實測圖 (水野清一測, 高柳重雄製圖) 20, 21

A) 天井　B) 北壁　C) 西壁　D) 南壁　E) 東壁

X. 第五B洞 實測圖 (水野清一測, 高柳重雄製圖) 21, 22, 24

A) 外壁　B) 橫斷面　C) 天井　D) 北壁　E) 西壁

F) 南壁　G) 東壁

拓　本　目　次

		参照頁
RUB. I	A. 樹下禪定佛（門口東側）	33
	B. 樹下禪定佛（門口西側）	33
	C-G. 蓮華文（門口天井）	33
	H. 蓮華文（門口東側）	32
RUB. II	A. 蓮瓣帶と楣拱額（南壁中央部）	35
	B. 蓮瓣臺座と小龕（南壁西部下層）	36
	C. 帷幕（南壁中央部）	35
	D. 菩薩寶冠（北壁右脇侍菩薩）	40
	E. 蓮瓣臺座（東壁坐佛龕12）	37
	F. 拱柱（東壁二佛並坐龕11）	37
	G. 光背（西壁右脇侍佛）	38
RUB. III	A. 天井（第五A洞）	43
	B. 床（第五A洞）	41
RUB. IV	A. 光背（第五洞東方石窟）	26
	B. 楣拱額（第五A洞東壁）	42
	C. 普賢菩薩と踰城太子（第五A洞南壁）	41

挿圖目次

第一圖　雲岡臺上墓塔 …… 4–5
第二圖　雲岡臺上墓塔 …… 4–5
第三圖　雲岡臺上南方墓塔 (A.D. 1591) …… 4–5
第四圖　雲岡臺上中央墓塔 (A.D. 1706) …… 4–5
第五圖　雲岡臺上北方墓塔 (A.D. 1629) …… 4–5
第六圖　第五洞第六洞外壁西塔 …… 4–5
第七圖　第五洞第六洞外壁西塔 …… 4–5
第八圖　第五洞第六洞外壁東塔 …… 4–5
第九圖　雲岡臺上土城 …… 4–5
第十圖　第五洞佛閣扁額 …… 4–5
第十一圖　第五洞第六洞平面圖 (水野淸一測, 高柳重雄圖) …… 8
第十二圖　第五洞第六洞外壁圖 (水野淸一測, 高柳重雄圖) …… 10
第十三圖　第五洞佛閣第三層平面圖 (水野淸一測, 高柳重雄圖) …… 11
第十四圖　第五洞門口南面 (水野淸一測, 高柳重雄圖) …… 12
第十五圖　第五洞南壁東方浮彫塔形 (水野淸一測, 高柳重雄圖) …… 14
第十六圖　第五洞南壁および東西壁佛龕配置圖 (高柳重雄圖) …… 16, 17
第十七圖　第五洞隧道壁面および天井 (水野淸一測, 高柳重雄圖) …… 19
第十八圖　第五a龕測圖 (水野淸一測, 高柳重雄圖) …… 22
第十九圖　第五b龕測圖 (水野淸一測, 高柳重雄圖) …… 23
第二十圖　第五c龕測圖 (水野淸一測, 高柳重雄圖) …… 23
第二十一圖　第五d龕測圖 (水野淸一測, 高柳重雄圖) …… 24
第二十二圖　第五洞第二段石窟平面圖 (高柳重雄圖) …… 25
第二十三圖　第五洞外壁東方石窟平面圖 (高柳重雄圖) …… 26

序　章

雲岡石佛寺

1

あらゆる建造物は，ときとともに變貌する。善美をつくした大伽藍が，いまではあれはてた，さびしい寺になってゐる。かって盛大をほこった信仰の中心が，いまや單なる歴史的記念物，古美術の殿堂に變質しつくさうとしてゐる。これが，いま雲岡石佛寺の一本の老木，一枚の扁額に，ふかい感懐をもよほすゆゑんである。

いま石窟のある雲岡鎮は，大同から西三十里，左雲から東九十里といふ。約十七キロと約五十一キロである。民國二年(A.D.1913)以後は大同縣に屬してゐるが，それ以前は左雲縣に屬してゐた。だから，石窟東端の岩壁には，いまなほ「左雲縣交界」の文字(本書，第一卷，Pl. 2B)がのこってゐる。鎮城は嘉靖三十七年(1558)の建設といふ。崖したにあって，丘のうへから敵をうける心配があるので，萬曆二年(1574)，丘のうへに新城をつくった。これが，いま丘のうへにある土城(Fig 9)である。たかさ三丈五尺，周囲一里五分，附設の墩臺は八といふ。[1] 女牆のみ塼でつゝんだといふが，いまはそれすらない。もっぱら防禦のためにつくったので，はじめから住民はゐなかったかとおもふ。舊城は，もと石佛寺わきの民家をとりまいてつくったのであらうから，人もすみ，道路に接してゐた。それで，そのまゝのこして行旅の便に供したといふ。東門を迎光といひ，西門を懐遠とよび，ともに萬曆十四年(1586)の額があがってゐる。[2] これらは，もっぱら明代の施設で，清朝ではあまり役にたってゐない。いま寺内に嘉靖四十三年(1564)の「重修雲岡堡記」があるのは，[3] 崖下の鎮城をつくったときの記録である。これに重修といってゐるからには，そのまへにある程度の城があったのであらう。

鎮城の東門外に，石佛寺の山門があり，門前が宿場のやうににぎはってゐた。石佛寺をおとづれた人は，こゝで馬をおり，南にある戲臺を背にして，みじかい石じきの山道をのぼったのである。山道の左わきにある楊の大木が，だれの目にも印象的であった。のぼりつめると小さい山門があって，門上に「石佛古寺」の額(A.D.1873)がある。山門のなかには金剛力士をおさめ，いはゞ金剛門がある。これをはいると，一段たかく正面に天王殿があり，左右にひくゝ東西廂がある。さらに金剛門のわきは鐘樓と鼓樓になってゐて，東がはにはいまも梵鐘がかゝってゐる。

天王殿のなかには，もとより四天王の塑像がつくられてゐる。この左右に小門があって，そのわきが廚房になってゐる。この小門を北にでると，こゝが佛閣まへの前庭である。中央にひくい月臺があり，そのまんなかに乾隆五十年（A.D.1785）の鐵香爐がある。左右に東西廂があり，客殿になってゐる。

佛閣は四層あって崖にさしかけてつくってある。ちゃうど左右に彫りだした塔形のあひだにあって，第六洞の門口と明窓とをおほふてゐる。門口は第一層に口をひらき，明窓は第三層に口をひらく。第四層にのぼると，緣がはをつたって，東に隣接する第五洞まへの佛閣，その第四層にうつることができる。

天王殿わき東廂の北にある小門をくゞると，小さい僧房のまへにでる。一宇三間の房子で，一僧一童，ときに，どこからか雲水がきて投宿する程度である。こゝから東へおりると井戸があり，菜園があり，僧侶の生活區域である。それから西にひきかへして，天王殿の東わきにでると，こゝに厨房まへの小門があり，それをでゝ佛閣東廂の南にある小門を東にぬけると，第五洞の佛閣まへにでる。この前庭は平面の塼床で，左右兩廂といふが，西廂は第六洞まへの東廂をかねてゐる客殿である。東廂は二層よりなり，觀音菩薩をまつる觀音殿である。

佛閣は四層，第六洞におけると同樣，第一層と第三層とに門口と明窓が口をひらいてゐる。ただ，こゝの第四層は一方第六洞佛閣にも達しうるとゝもに，東にでると屋廊があって，すぐ丘のうへにでることができる。こゝにでると，こゝはまた一區をなし，南に佛閣の大棟が牆塀のやうにならび，北がはに岩壁がつゞく。岩壁には小さい石窟（本書，第二卷，Pl. 87, 88）がつくられてゐるが，第六洞の直上はやゝ大きな石窟となり，一宇の佛殿がつくられてゐる。もっとも，このなかの佛像はみるかげもないものである。

これと逆に，第六洞佛閣の西廂北にある小門をぬけると，第七洞まへの佛閣になる。これも四層樓であるが，ひどく破損してゐる。たゞ，この第四層へは，第六洞佛閣から廻廊がかゝってゐて，達することができる。佛閣まへは第八洞まへと共通の前庭になり，東と南は客殿の裏壁，西は貧弱な窰（yao）づくりの西廂であった。第八洞の佛閣はすでに崩壞し，洞前に大きな堆積ができてゐたし，第七洞の佛閣も崩壞の寸前にあり，第一層は輾礎の小屋につかはれてゐた。

さらに，この西廂北の小門をでると五華洞まへの大廣場になる。この廣場は，西は雲岡鎭城のたかい東壁にかぎられ，南は民家のひくい壁でかこまれてゐた。そのうへ西端，第十三A洞まへには南面の三間房子があったのである。

これが，ほゞ近年における石佛寺の全貌である。すくなくても，鎭城のできた明末からは，現在の寺域が確定したのであらう。いまその東隣に接して民國二十年（A.D. 1931）以後にできた一宇の建物と花園とがある。これは騎兵師令趙某のつくった雲岡別墅である。

1 『左雲志』（1803年修）卷三.　2 「雲岡金石錄」59.　3 「雲岡金石錄」51.

2

石佛寺門前の道を西にすゝむと，おのづから村内に入り，鎮城の東門をくゞることになる。東門をはいると右手に娘々廟があった。ついですゝむと，第二十洞の南方あたりに財神廟があった。さらにすゝんで鎮城の西門をでると關帝廟があり，路南に戲臺があった。このあたりは，もうだんだんと川にちかく，丘をまはってすゝむと，高山鎮，左雲にむかふ道は，おのづから川をよこぎって，南の臺地にのぼることになるのである（本書，第一卷，Map 2－3）。

これに反して，石佛寺の門前から東にむかふと，龍神廟のある小溪を左にみて，第三洞まへの石道にでる。第三洞の內外には，近年まで寺院があったとおぼしく，いたるところに半壞の壁がのこってゐる。石道は河原の平地より一段たかく，丘にそって東にゆく。第二洞，第一洞のまへをへて東端小窟のまへにいたり，つひに大同にむかふ。そのうち第二洞の西に泉があり，また第二洞のなかにも泉がある。これこそ地志にいふ石窟寒泉である。左雲四景の一[1]，あたりの摩崖に遊人の題記があるのもうべなるかなである（本書，第一卷，Map 1）。

このあたりからみると，部落の平地に楊樹鬱蒼とおひしげり，そのあひだに巍然として黃綠の屋根がそびえてゐるのは石佛古寺である。まさに『朔平府志』卷三の「樓閣は層凌たり，樹木は蓊鬱たり，嚴然として一方の勝概たり」といふがごとくである。

ところが，龍神廟の小さい谷をのぼると，丘のうへにでる。一望の高原で，はるかに燉臺がみえ，道はおのづから水泉村に通じてゐる。第六洞のうへにはひくい土饅頭があり，なにかと首をかしげしめる。その西に丘のうへの土城がある。土城の東北には，南北にならんで三つの墓塔が點在する。南端は祖師明公等の開山塔で[2]，萬曆十九年（A.D. 1591）の建立である。北端は妙明云云の文字のある墓塔で[3]，崇禎二年（1629）の建立，中間は無瑕和尙の墓塔[4]，康熙四十五年（1706）の建立である（Fig. 1－5）。

3

『朔平府志』卷三には，なほ左雲縣石佛寺の條に，つぎのやうにかいてある。

縣の東九十里の雲岡堡にあり。また佛窰山と名づく。つたふるに後魏拓拔氏のときよりす。神瑞にはじまり正光にをはる。すべて七帝にして百十餘年をへたり。規則はなはだひろし。もと寺十所あり。一を同升といひ，二を靈光といひ，三を鎭國といひ，四を護國といひ，五を崇福といひ，六を童子といひ，七を能仁といひ，八を華嚴といひ，九を天宮といひ，十を兜率といふ。そのうち元載につくるところの石佛は二十龕，石窰は千孔，佛像は萬尊あり。隋唐より宋

1 『朔平府志』（1733年修）卷三，「迤東數步，石窟あり，噴水淸冽のむべし，行道するもの多くこれにかる，石窟塞泉といふ，すなはち，四景の塞泉靈境なり。」　2 「雲岡金石錄」56.　3 「雲岡金石錄」58.　4 「雲岡金石錄」57.

元をへたり。

佛窰山(Fo-yao-shan)ははじめてきく名であるが，このあたりでは石窟のことを窰(yao)とよんでゐる。神瑞年間(A.D. 414–415)にはじまるといふのは，なにも根據のない俗說である。しかし，元魏の開鑿を「石佛二十龕，石窰千孔，佛像萬尊」といってゐるのは，まさにそのとほりである。石窟の全部が北魏の作で，ある。雲岡十寺の名は，もとより盛時の規模をいふもので，昨今のことではない。けれども，それのもとづくところは不明である。北魏の舊をいふものとは，おもはれない。あるひは遼代復興期の寺名をつたへるものであらうか。

明代では，もとより邊境の一鎭であった。そんなに佛寺のさかんになる理由は，どこにもない。鎭城が明末の規模であるごとく，石佛古寺も，おそらくそのころ以來の結構であらう。

明代は概して北族の入寇でなやまされ，邊土の防衛には力をもちひたが，明末の嘉靖，萬曆(A.D. 1522–1919)のころは，やうやく邊郡も充實して小康をえた。したがって，明末から清一代を通じて，雲岡石佛寺は府城，大同にちかい名勝として，地方人士の遊歷をみたものである。第六洞佛閣內にある泰昌元年(1620)「游石佛寺記」には，萬曆四十七年(1617)の冬，石佛寺に遊んだことを記し，五言のながい詩を賦してゐる[1]。これに似た「遊石佛寺」の詩文は方志の藝文志[2]をにぎはし，石佛寺が，この地方の名刹であったことがうかゞはれる。たまたま康熙帝は，康熙三十五年(1696)冬オイラァト(Oirat)討伐の歸途この道をとり，十日に左雲，十一日に石佛寺をおとづれ，いまなほ第六洞門口をかざる御書の扁額「莊嚴法相」(本書，第三卷，Pl. 2)をたまはった。さうして翌十二日大同にいで，十三日陽高，十四日天鎭と，旅路をかさねて北京に歸還してゐる[3]。

なほ清朝一代を通じて民國にいたるまで，モンゴル(Mongol)人の巡禮が多かった。塞外から五臺山に參詣するモンゴル人たちは，かならずこの石佛寺をおとづれた。チベット文『普賢行願讃』と蒙文經の版木は，このときに販布する護符のためであった。また五華洞までの廣場は，かれらの快いキャンプ地であったといふ。

したがって，明末以後は，しばしば石佛寺の補修がおこなはれ，その重修碑は寺の內外にたってゐる。このうち，もっとも古いものは第七洞前の螭首だけのこった明碑であらうが[4]，これの年次は不明である。しかし，第六洞佛閣內には，萬曆二十年(1592)の鐵鐘と順治元年(1644)の鐵鐘とがある[5]。清朝になって最初の重修は，朔平府總督佟養量のそれである。これについては第五洞佛閣內にある順治八年(1651)の「重修雲岡大石佛閣碑」にのべられてゐる[6]。たぶん第五洞より第七洞にいたる，洞前の諸佛閣や堂宇を修理したものとおもふ。

康熙帝の行幸後は，また佛閣の重修がおこなはれ，その翌々三十七年(1698)の「重修雲岡寺碑」(大同知府葉九思建)が第五洞佛閣內にたってゐる[7]。ついで，乾隆三十四年(1769)の「重修雲岡石佛

1 「雲岡金石錄」49　2 『朔平府志』卷一二，『大同府志』(1776年修)卷三〇，三一，『左雲志』卷一〇，『大同縣志』(1830年修)卷一九，二〇。　3 『朔平府志』卷三。　4 「雲岡金石錄」50.　5 「雲岡金石錄」53,54.　6 「雲岡金石錄」43.　7 「雲岡金石錄」44.

第一圖　雲岡臺上　墓塔　Fig. 1. Tomb-Pagodas of Yün-kang.

第二圖　雲岡臺上　墓塔　Fig. 2. Tomb-Pagodas of Yün-kang.

第三圖 臺上 南方 墓塔 (A.D. 590)

Fig. 3. South Tomb-Pagoda.

第四圖 臺上 中央 墓塔 (A.D. 1766)

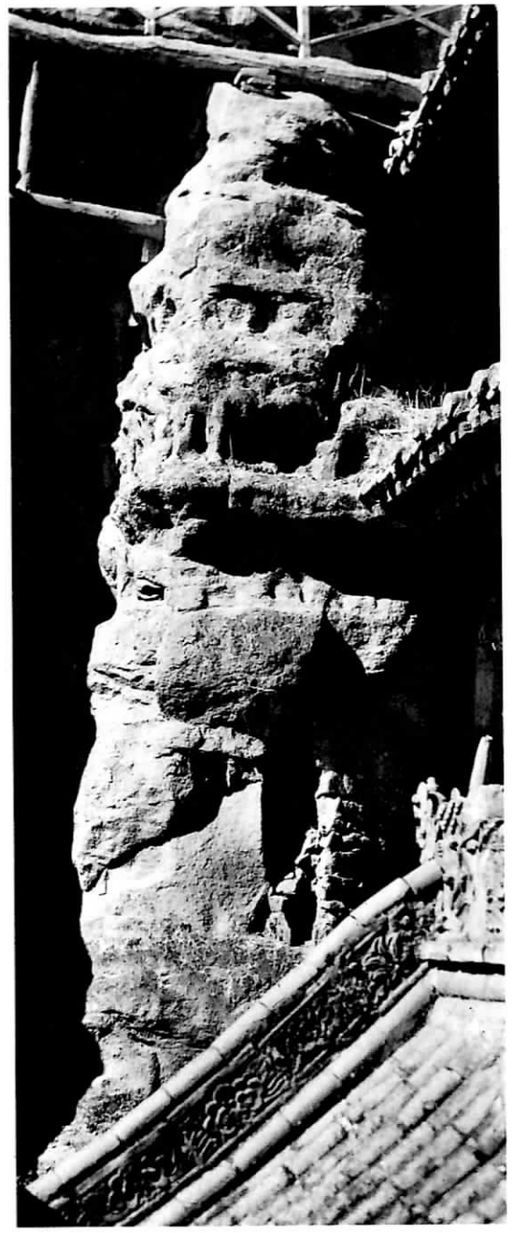
Fig. 4. Middle Tomb-Pagoda.

第五圖 臺上 北方 墓塔 (A.D. 1629)

Fig. 5. North Tomb-Pagoda.

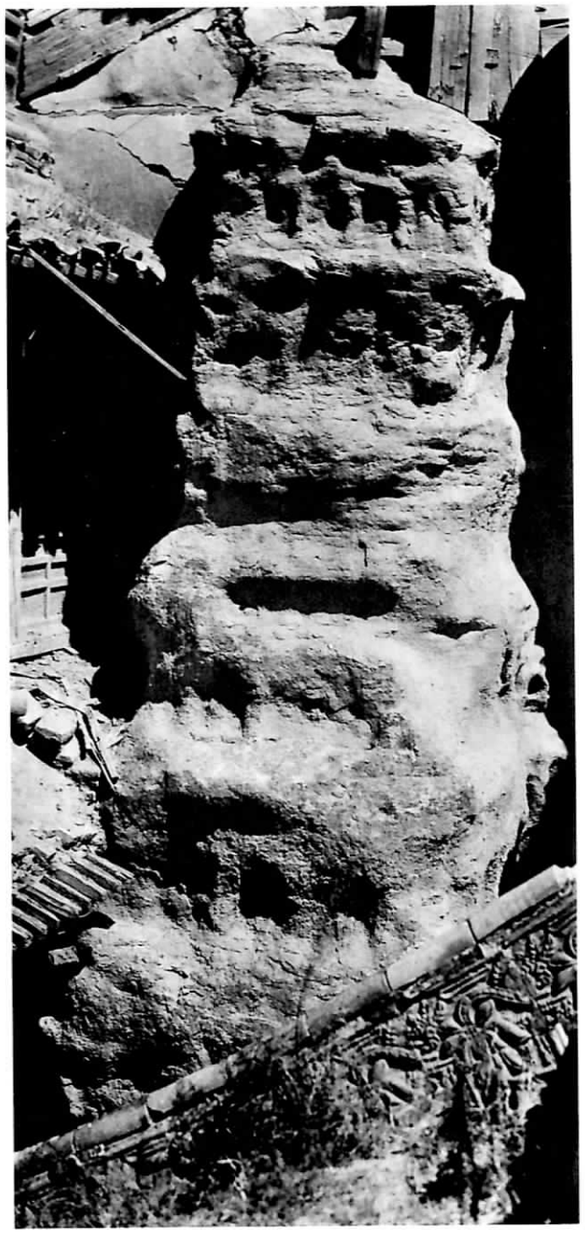
第六圖　第五洞　第六洞　西塔（寫眞右）

Fig. 6. West Pagoda of Caves V and VI. (Right)



第七圖　第五洞　第六洞　西塔

Fig. 7. West Pagoda of Caves V and VI.



第八圖　第五洞　第六洞　東塔

Fig. 8. East Pagoda of Caves V and VI.

第九圖　雲岡森上一土城　Fig. 9. Ruined Fortress of Yün-kang.

第十圖　第五洞　佛閣　扁額　Fig. 10. Tablet of Storeyed Pavilion, Cave V.

寺碑[1]」(僧寂容建)，咸豐十一年(1861)の「重修大佛寺碑[2]」，同治十二年(1873)の「重修廟宇碑[3]」が，おなじ第五洞，第六洞佛閣内にたってゐる。第三の碑は石佛寺現在の山門，鐘樓，鼓樓を重修したものである。もっとも最後のものは，第九洞前室内にある民國九年(1920)の「重修雲岡石佛碑[4]」であるが，これは第九洞附近の石佛の補彩をさすのであらう。

これらのたびかさなる修理は，主として堂宇の修理であるが，石佛の修理，補彩もふくまれてゐる。その結果，この石佛寺のある中央區は，すっかりあたらしい補彩をかうむり，かへって北魏の原狀からとほざかってゐる。まことに俗惡な補修が多いのは，近世の田舍職人の手にかゝったためで，まことに遺憾なことである。けれども，これも石佛寺の莊嚴を維持しようとする崇佛家の心情にでたことをおもへば，かならずしも非難することはあたらないであらう。

石佛寺山門には，べつに乾隆十七年(1752)の「重修雲岡大路碑記」がある[5]。道路を修理した碑記である。武州川にそうた道路は，しばしば夏季の出水に破壞されてゐる。

明清以後は，うへにのべたやうに，寺域は中央群のあたりにかぎられてゐた。西方群はあれるにまかせ，一部は民家のうちになってゐた。それで1940年，ときの政廳によって石佛寺管理所がつくられ，全域にわたる整地がおこなはれ，全域にわたって保存區域が設定された。

いま，石窟の各洞には，それぞれ固有の名稱がある。はたして，いつからついたか，どこまで根據があるのかわからないが，とにかく參考のため，以下にならべておこう。

石鼓洞(第一洞)	寒泉洞(第二洞)	靈巖寺洞(第三洞)
阿彌陀佛洞(第五洞)	釋迦佛洞(第六洞)	準提閣菩薩洞(第七洞)
佛籟洞(第八洞)	阿閦佛洞(第九洞)	毘盧佛洞(第十洞)
接引佛洞(第十一洞)	離垢地菩薩洞(第十二洞)	文殊菩薩洞(第十三洞)
導佛洞(第十五洞)	接引佛洞(第十六洞)	普賢菩薩洞(第十七洞)
普賢菩薩洞(第十八洞)	寶生佛洞(第十九洞)	阿閦佛洞(第十九東脇洞)
阿閦佛洞(第十九西脇洞)	白佛爺(第二十洞)	

第八洞佛籟洞の名は，いま明窓のうへにはめられた扁額にかゝれてゐる。第七洞にも扁額があって「西來第一山」とかいてある[6]。いま伽藍の中心をなす第六洞區をでゝ，西方第一の石窟であるからであらうか。洞の名にみえる佛，菩薩の名は，まったく根據がないやうである。

4

遼金元時代(916–1367)になると，明清時代(1368–1911)とは，かなり樣子がちがってゐた。それは雲岡石窟の復興期で，いまのやうに寺域が中央區に限定されず，第二十洞までの全域にわたって

1 「雲岡金石錄」46.　2 「雲岡金石錄」45.　3 「雲岡金石錄」47.　4 「雲岡金石錄」52.　5 「雲岡金石錄」42.
6 順治四年(A.D.1647)兵部尚書兼都御史馬柱國の獻額である。

佛閣がたちならび，實に壯觀を呈してゐた。それは各石窟まへに，そのころの塼がしいてあったり，そのころの瓦の出土するのでわかるのであるが，いまの僧房東部からも，當時の礎石かなにかとおもはれるものが若干でゝゐる。[1] 雲岡十寺の名も，おそらく，この時代のなごりであらうとおもはれる。鎭內外の廟は明以前にさかのぼるものはないが，第四洞の小溪にある龍神廟は，遼代において，いまよりも，はるかにしっかりした建物であった。

のみならず，石佛の諸像が修補，加彩されたことは，第十三洞內の刻文（本書，第十卷，Pl. 24）に「大小一千八百七十六尊」を修したとあることによっても，その一端がうかゞはれる。それに，第七洞，第八洞にみられる泥塑の修補（本書，第四卷，Pl. 32，第五卷，Pl. 33）は，その樣式からみて，このころのものとみられる。また第十九東脇洞にみる光背の雲文や火焰文（本書，第十三卷，Pl. 86，94）は，あきらかに遼代の彩色である。それに各洞大像にはめられた黑釉陶器の玉眼は，若干のちの修補をみるけれども，このときにはじめられたものと推定される。のみならず，すくなくとも中央區における現在の色彩は，その後數次の追加補彩をみとめるにしても，基本的にはこのときの補彩であるとおもふ。

さういう修補の事業がさかんであったのに平行して，つひに第三洞の三尊（本書，第一卷，Pl. 75）とか，第十一洞方柱諸尊（本書，第八卷，Pl. 55）とか，若干のあたらしい石像もつくられたらしいのである。これをもってみても，遼代（A.D. 916–1125）の復興がいかに大規模なものであったかゞわかるであらう。それは，もとより遼の佛教興隆といふことが基礎にあるわけであるが，そのうへ遼が契丹族（Chi-tan）のたてた北方の國で，自然に大同地方が重視され，大同が五京の一になった（1044）からでもあらう。もとより北魏ほどの盛大にはいたらなかったが，重熙七年（1038）には大同の華嚴寺もでき，雲岡の石佛寺も全面的に修築されるやうになったのであらう（本書，第一卷，p. 35，36）。

それにしても石窟寺の名はどこにもみえないのであるが，はしなくも遼の最後，西京大同の陷落して，天祚帝の西走するにあたり，石窟寺の名があらはれるのは，奇しき因緣である。すなはち，『三朝北盟會編』卷五に「天祚大いにくるしみ，よりて倉皇として雲中府より，石窟寺より，天德寺に入り，漁陽嶺におもむき，また陰夾山に竄入す」といふ。[2] これよりさき，北宋の皇祐年間（A.D. 1060）につくられた『廣淸涼傳』（大正大藏經，第五一卷，p. 1105）には雲州石窟寺の名がみえてゐる。雲州は大同のことである。

金代は西京の制も，そのまゝおそったほどで，だいたい遼の繁榮がもちこされたものとみてよい。元代になっても，いまよりはるかに大規模で，僧侶もかなりゐたらしいことは，はしなくも發見された第四洞內，第三十四洞內の墨書の落書（本書，第十五卷，Pl. 50）によって知られる。[3]

1 梁思成，林徽音，劉敦楨，「雲岡石窟中所表現的北魏建築」（中國營造學社彙刊，第四卷第三·四期），北京1934，Fig. 47.

2 卷二一に引用された「亡遼錄」にも，これとほゞ同樣の記事があるが，石窟寺經由の年は保大三年（A.D.1123）であるか，四年（1124）であるか，はっきりしない。

3 「雲岡金石錄」27－40.

さらにさかのぼって，隋唐時代(A.D.581–907)になると，かへってなにもわからない。それは邊郡の寺院であったからであらう。たゞ二三の文獻にあるところをひろってみると，かうである。

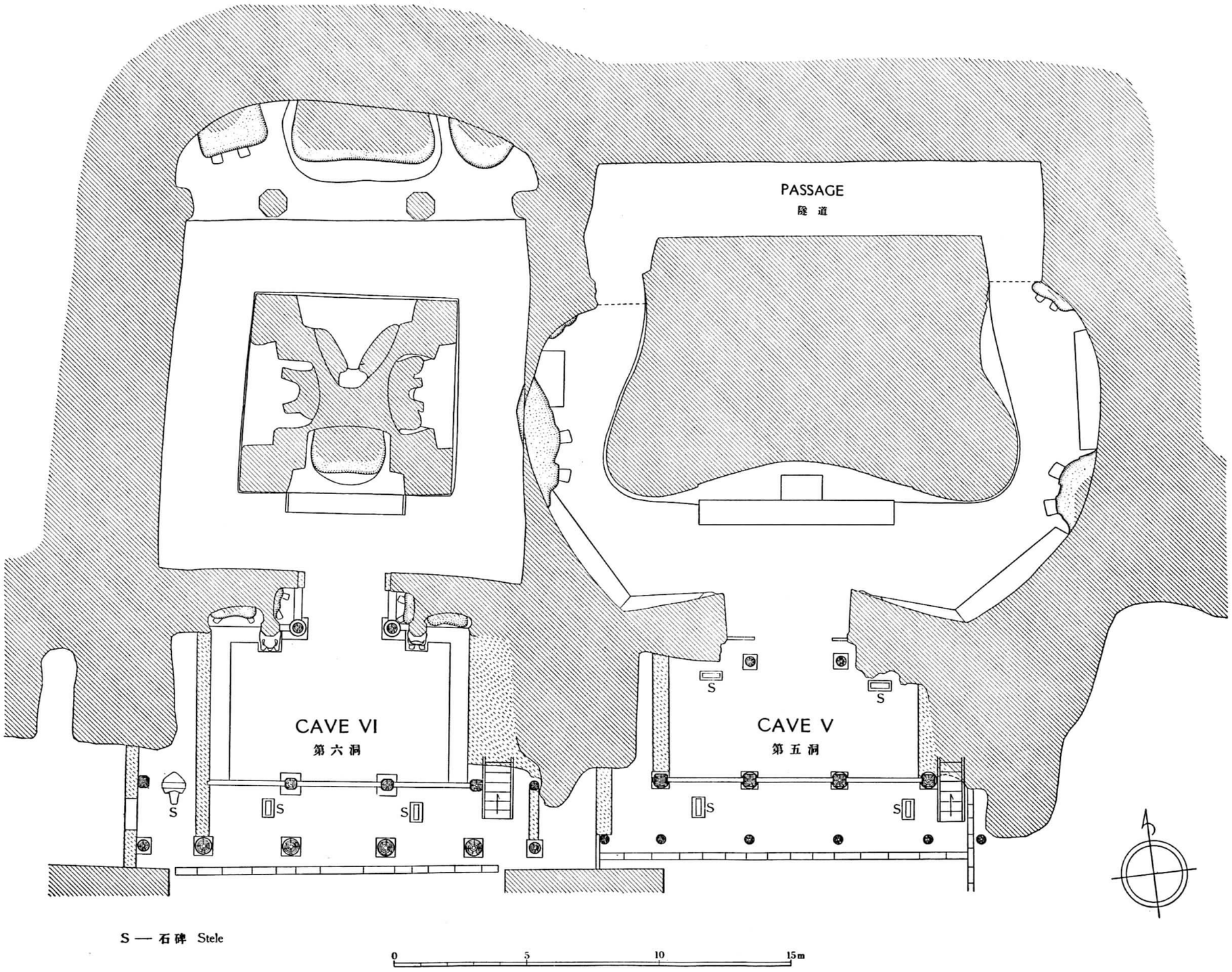
唐の道宣(A.D.596–667)の『廣弘明集』(大正大藏經，第五二卷，p.103, 104)には，曇曜造窟のことをのべ，さらに，

今時みるもの，つたへいふ。谷のふかさ三十里。東は僧寺たり，名づけて靈巖といふ。西頭は尼寺なり。おのおの石をうがちて龕をつくる。千を容るゝものより已還者あひつぐ。北の石崖のうちにおいて，七里は高峻をきはめ，佛龕あひつらなり，餘處にはときに斷續あり。佛像の數量は，だれかその計をはからん。一道人あり，年八十。像に禮することを業となし，一像ごとに一拜す。中龕にいたって死し，尸は殭して地に伏す。石をもって封じ，いまに見存す。時代をはかるなし。朔州の東三百里，恒安鎭の西二十餘里にあり。往々來者これをのぶ。まことに不思議の福事なり。

と。唐では馬邑(朔縣)が朔州，大同が恒安鎭であった。谷のふさか三十里は，この武州川の谷あひをいふのであらう。東を靈巖といひ，僧寺となり，西端が尼寺となる。靈巖寺の名は，いま東方群第三洞の名になってゐる。あるひは，その間に脈絡があるのであらうか。千人を容れる石窟から，しだいに小さいものにいたるまで，かずかずあり，佛像の數は無量であるといってゐることも，唐代の傳聞にもとづくものであらう。

道宣は『續高僧傳』(大正大藏經，第五〇卷，p.427)卷一，曇曜傳においても，ほゞ類似の記事をのこしてゐるが，「櫛比あひつらなること三十餘里」といってゐるのは，さきの谷のふかさ三十餘里にあたり，その間に石窟が櫛比するといふのである。これは，話が大きすぎて實際にあはないが，「東頭の僧寺はつねに人に供す」といふのはありうることゝおもふ。なほ「碑碣見存するも，いまだことごとく陳委せず」といってゐる。

この「曇曜傳」には，曇曜が石窟通樂寺にゐたことをつたへてゐる。通樂寺の名をつたへるのは，たゞこの一書だけであるが，また同書卷二五咸通のところには，僧明道人あり，北臺石窟寺主だといってゐる。北魏以後は，しだいにおとろへたこともちろんであるが，隋唐時代には，なほかなりの盛況にあったらしい。それが，しだいに衰微して六百年間，遼代には建築の大復舊を必要とする段階にまで，たちいたったものであらう。その遼の復興から現在にいたるまで，また，約九百年間，かくのごとく寺は荒廢し，信仰もまた地におちてしまったのである。



第十一圖 第五洞 第六洞 平面圖 Fig. 11. Plan of Caves V and VI. 1 : 180

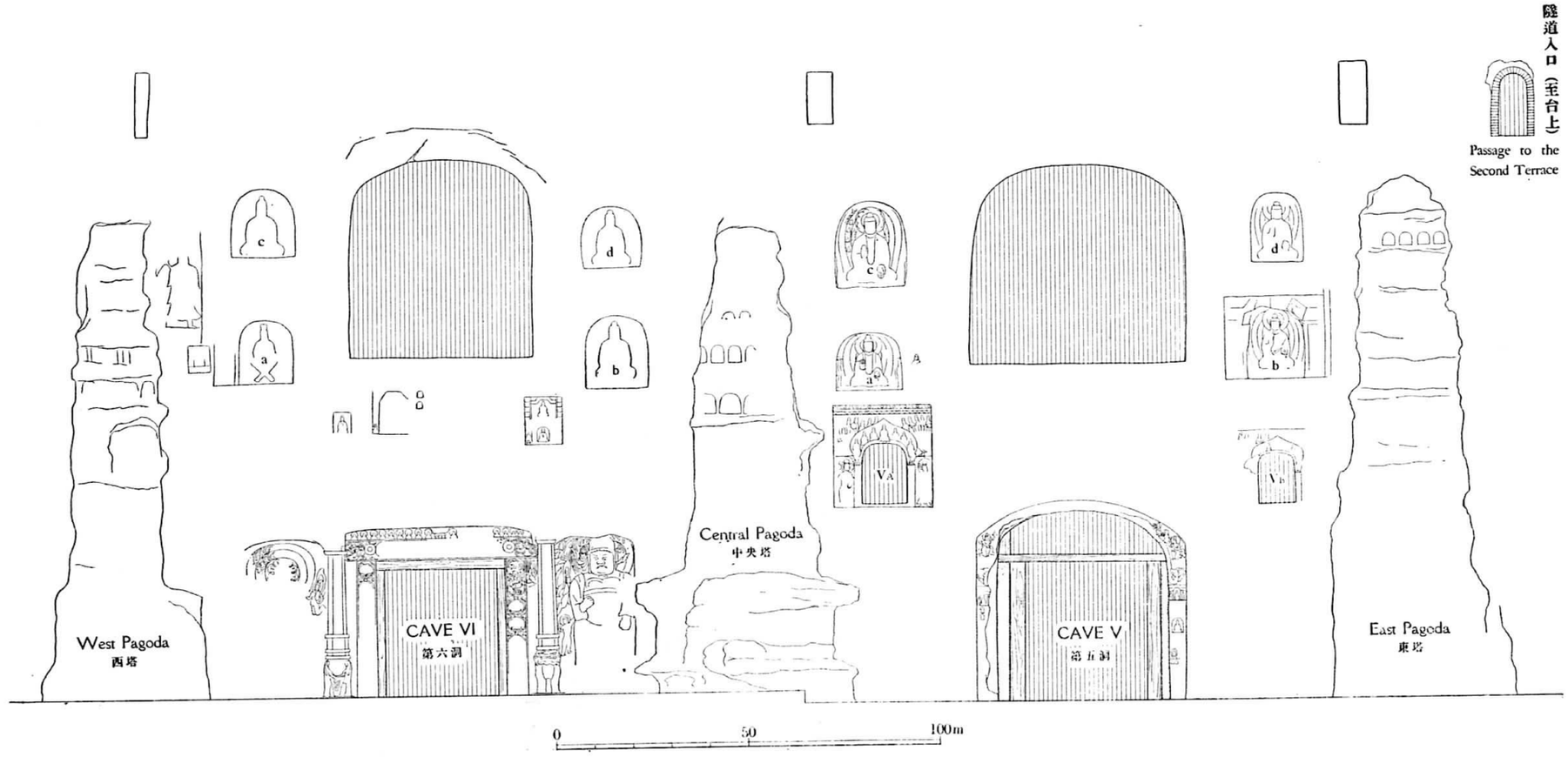
第　五　洞

第一章　外　壁

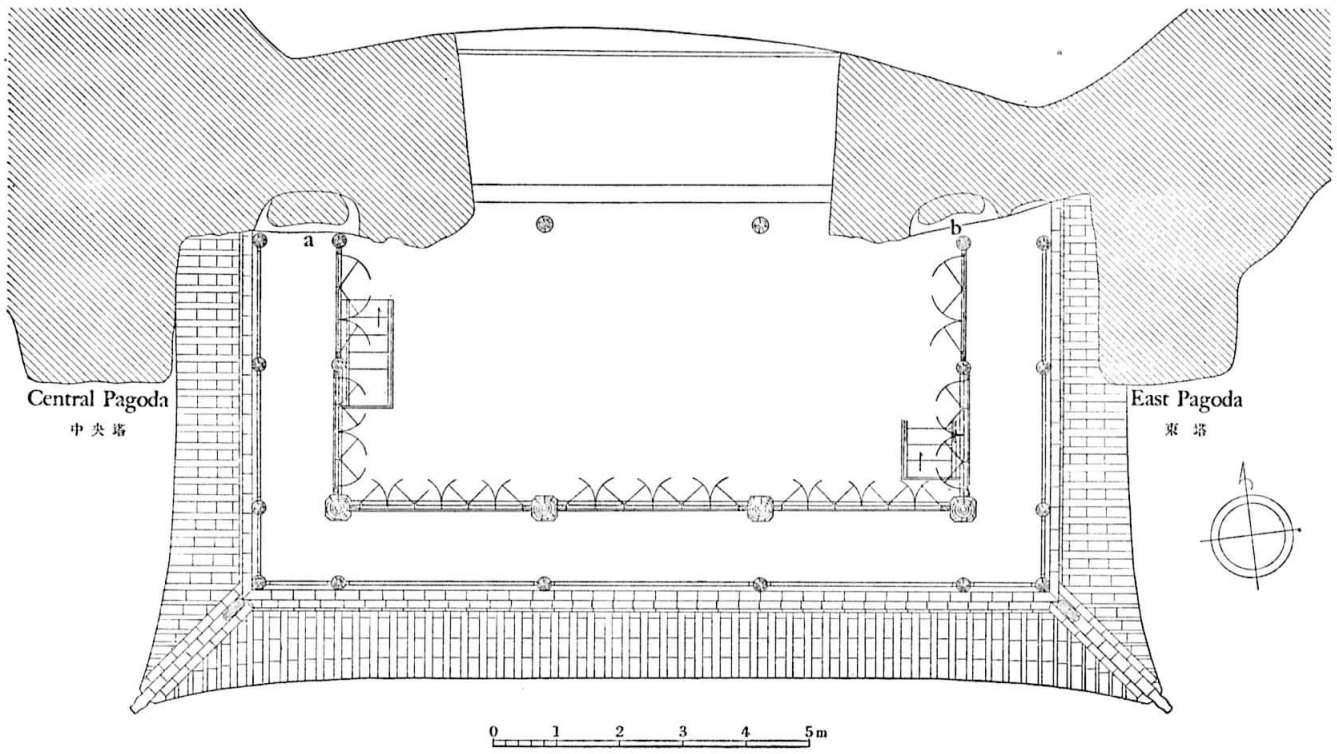
〔佛閣〕 第五洞以下第十三洞までは一群となり，いはゞ中央群を形成する(本書，第一巻，Map 2)。これが近世，すくなくとも明末以來，石佛古寺の寺域であった。そのうちでも第五洞から第八洞までが中心地區で，洞前には，みなそれぞれ佛閣があった。たゞ第八洞まへの佛閣だけは，きはめてちかいころに崩壞したらしく，その堆積が最近まで洞前にあった。また第七洞まへの佛閣も，また現在崩壞の寸前にある。

たゞ第五洞と第六洞とは一對窟 (Fig.11) である。そのまへの佛閣は，現在でも寺の中心であるだけに，まだ堅牢で巍然としてそびえてゐる。だが，おしいことに，あまり優秀な建築ではない。參道の一直線上には，第六洞まへの佛閣があり，その東となりが，この第五洞佛閣である。まへに塼床の前庭があり，左右に東西廂がある。西廂は客殿，東廂は觀音殿である。南がはは僧房の背面であり，入口は西廂と僧房西隣の厨房とのあひだにある。佛閣は四層樓で，岩壁にさしかけてつくりられ，せまい階段があって，のぼれるやうになってゐる。のぼると，第四層目には西の第六洞佛閣に通ずる橋と，東の丘上にでる屋廊とがある。丘上といっても，こゝはほんとうの丘上でなく，せまい中間の臺地である。この臺地にそうてひくい岩壁があり，小さい石窟 (Fig.22) がならんでゐる。そのうちにはかなりよくのこったもの(Pl. 87,88)もあり，また未完成の塔洞もあるが，あまり重要なものはない。いま第六洞のうへに小さい佛殿があり，その西わきに小さい僧房がある。佛殿の本尊は，たゞの泥作坐佛である。丘のうへにでると，第六洞のうへは，なにか建物でもあったのか，ひくい墳丘狀 (Pl. 3) を呈してゐる。一種の塔婆(stūpa)的意味をもった營造があったのかも知れない。

佛閣軒したには，東に咸豐辛酉 (A.D.1861) の「重修大佛寺碑記」があり，西には，これに應ずる蒙文碑がある。なかにはいると，東がはに康熙戊寅 (1698) の「重修雲岡寺記」があり，西がはに順治辛卯 (1651) の「重修大石佛閣碑記」がある。また軒ばには，これらの重修記に應ずるやうに，順治辛卯の「大佛閣」の扁額 (Fig.10)，乾隆四十六年 (1781) の「斯仁至矣」「思佛永護」の扁額，咸豐七年 (1857) の「法護蘭山」の扁額，および光緒甲午 (1894) の「四大神明」，民國十七年 (1928) の「生荷再造」の扁額があり，二層正面に光緒二十一年 (1895)「亘古常昭」の扁額がある。また內部洞口には乾隆丙戌 (1766)「如來聖像」の扁額があり，左右に「佛境佛地乘建佛心成佛像」と「雲山雲嶺帶將雲水繞雲城」の對聯がある。順治の扁額は，清初の大修理に際したもので，奉獻者としては「特命總督兵馬左侍郎佟養量立」の文字がみえる。また咸豐七年の扁額は，咸豐の重修に銀四百兩 (約15,292 gr.) をだした阿拉善(Alashan)



第十二圖　第五洞第六洞外壁圖　　Fig. 12. Outside Walls of Caves V and VI.



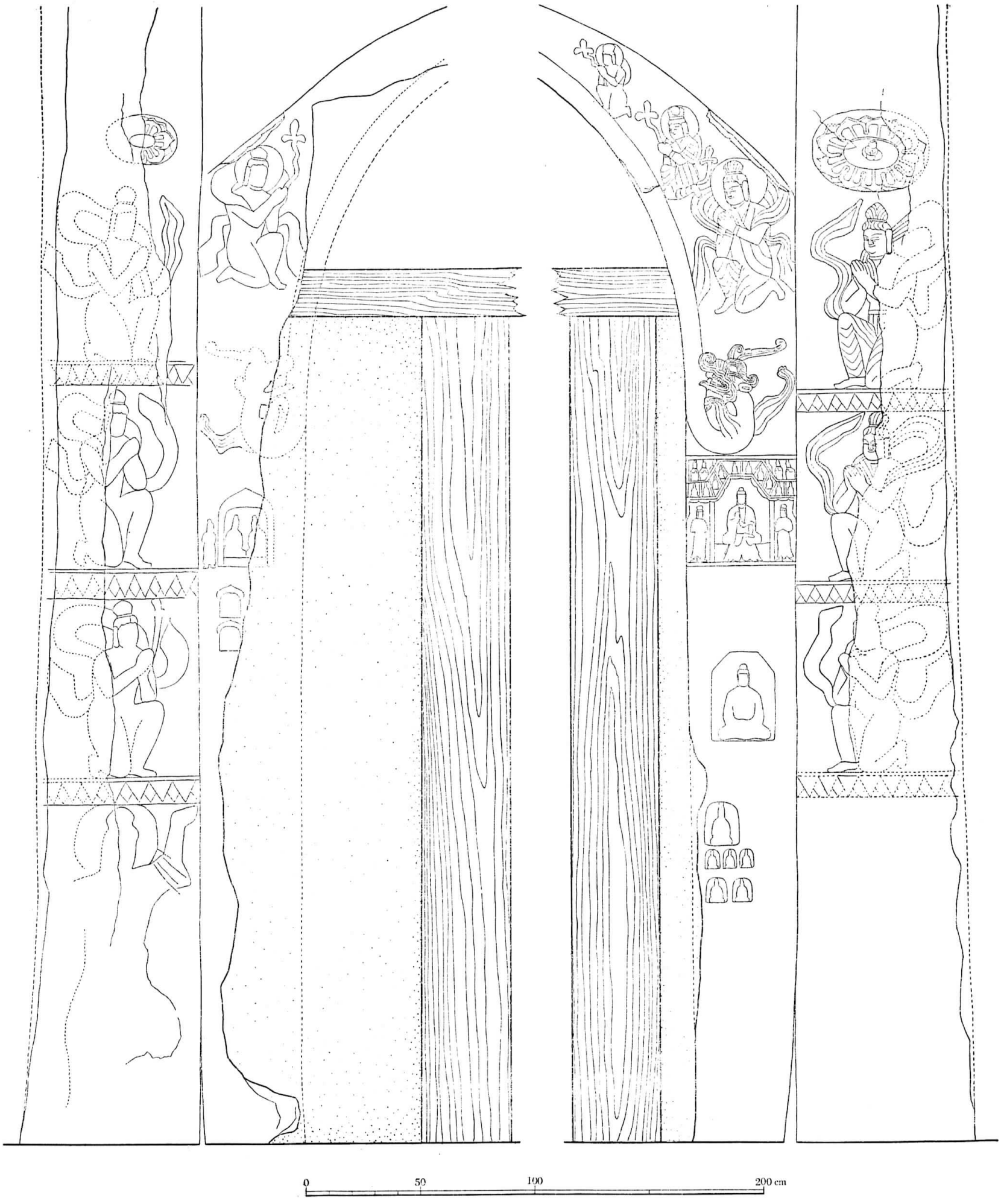
第十三圖 第五洞佛閣第三層平面圖 Fig. 13. Plan of Third Storey of Cave V Pavilion.

札薩克(Jasak)親王の奉獻である。(Pl. 1–8, Plan I, II)

〔外壁〕 外壁は第六洞と一對になって，その中間と兩はしとに，つがう三つの塔形(Pl. 3, 8, Fig. 6–8, 12, 第三卷, Pl. 6, 7, Fig. 3)がある。かなりいたんでゐるため，なん層あったかは，はっきりしないが，七層以上をかぞへるから，たぶん，九層塔であったとおもふ。門口と明窓があることは，つねの石窟にみるごとくである。佛閣があるとはいふものゝ，外壁は一樣にいたんでゐる。門口のうへ西東にあたって第五A洞と第五B洞とがある。さらに明窓東西に佛龕 a, b, c, d がある。明窓のうへに二つの長方形の孔がある。これは第九，第十洞の梁孔とおなじくあさいものであるが，さらに，そのそとがはに大きな長方形の孔が一對づゝある。これはたいへんに大きな孔で，かぎの手にまがり，うへにあがってゐる。そのうえの口はみへないけれども，第三洞(本書，第一卷，Pl. 68)のごとく，丘のうへにつきぬけてゐるとおもふ。いま丘上にでる東端の隧道(Fig. 12)も，もとは，この種の孔であったらしい。なほ，中央塔形の東がはに，追刻された小さい佛龕が注意される。

〔門口〕 門口のあるところは，まづ一段と外壁をほりくぼめてゐる(Fig. 11)。それは不規則なアァチ形である。このアァチ形のなかに，また，アァチ形の門口をつくってゐる。だから，この拱額にあたるところは不規則で，たゞ拱梁と拱梁をとりまく跪坐供養者(Fig. 14)しかみえない。拱端のした，傍柱にあたるところは，破損と補修とで，なにもみえない。たゞ東がはは拱端獸形のしたに追刻の小佛龕がある。それから，うちがはに面した兩そでに，浮彫跪坐供養者の縱列がある。

門口のうちがはは完好なアァチになってゐる。せまい蓮瓣文帶で上下にわかれ，したは，ほそ



第十四圖　第五洞門口南面　　Fig. 14. Cave V, Entrance Gateway

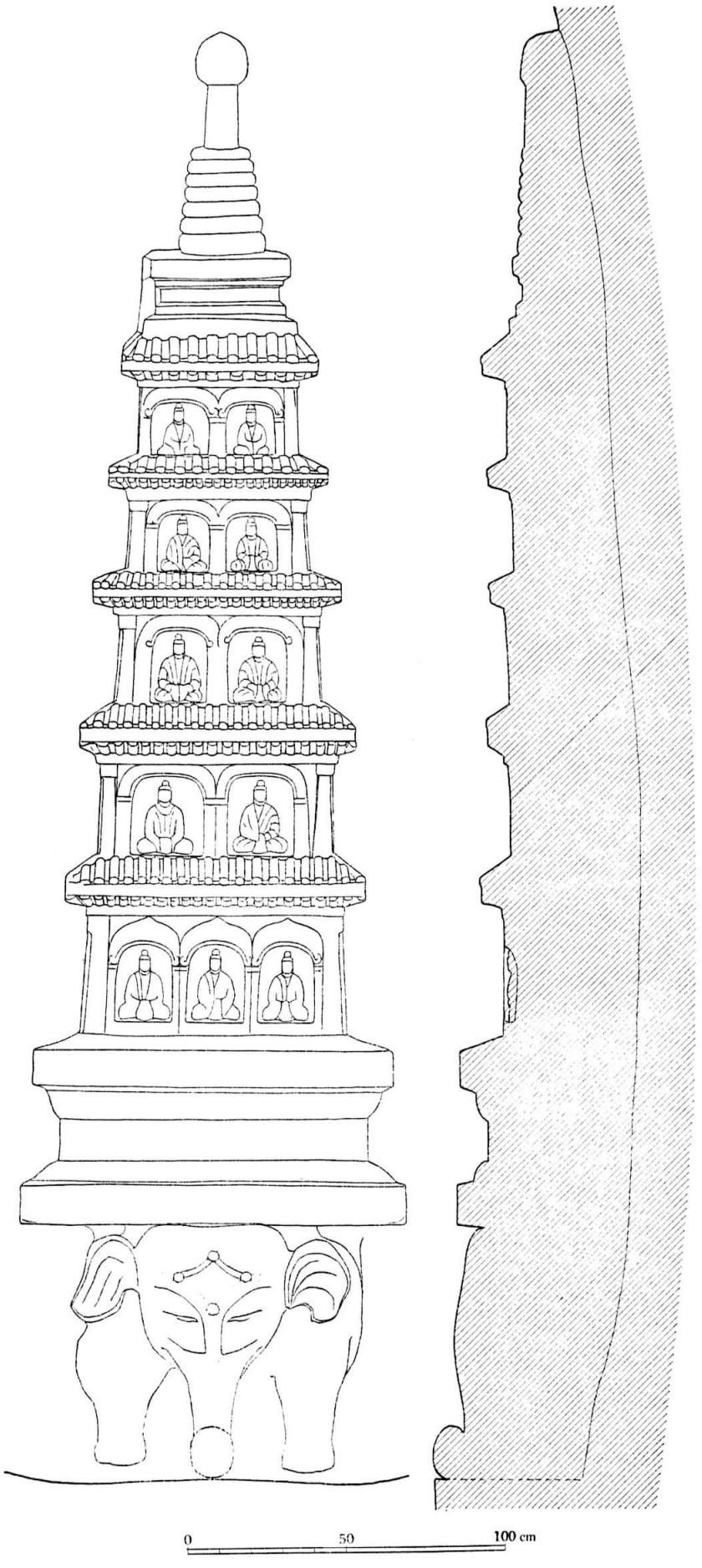
い角柱にかこまれた壁面に，鳥冠をいたゞく門神の像をほり，うへはせまい拱梁でかこまれた壁面に樹下禪定佛をあさく彫る。天井になると，相むかふ四體の飛天とそのあひだに散在する化生(aupapāduka)の蓮華を彫ってゐる。樹下禪定の像は，第七，第八洞のごとく樹下比丘形でなく，佛像である點がちがってゐる。門神は兵仗をもたず，たゞ踊躍して勇猛のさまをしめすのみである。これまで，うへをおほふてゐた(Pl.11)のは，あきらかに康熙三十七年の泥像である。(Pl. 9–17, Plan III)

〔明窓〕 明窓も，かすかにアヂ形をなすが，天井の部分はなにが彫られてゐたか，破壞のためわからない(Fig. 12, 13)。外壁の破壞は，比較的すくなく，側壁の面はほとんど完存してゐる。東西とも佛龕はなく，千佛をぎっしりとつめてゐる。その點，第十洞(本書，第七卷，Pl.33, 34)，第十九洞(第十三卷，Pl. 8, 9)におなじといへるが，千佛のありかたは，すっかりちがふ。東西壁をくらべると，西壁の方が完備して，したに供養者列像があり，うへに天蓋裝飾がある。そのうへは坐佛列龕があり，蓮瓣帶があり，天井にをはってゐる。東壁は，したの供養者列像を缺き，うへの天蓋飾を缺く。最上の列龕も，やゝ雜然としてゐる。おそらく，これらの三帶はおくれてつくられ，最初の計畫がみだされたものとおもふ。たゞ，その原因がなにであるか，はっきりしない。製作の時期は，その樣式の大差ないことから，斷絶のなかったものとおもへる。

このあたりの製作は，體軀が豐滿で，服制も古式であるから，門口の大部分とともに，第五洞でも最初につくられた部分だとおもはれる。(Pl.18–22)

第二章　南壁と東西壁

〔南壁〕 南壁は，ほゞ垂直にたってゐるが，つよいなかぶくれである。これは雲岡石窟にみる一般的特徵である。最上は三角垂飾と弧狀の幕とからなる天蓋裝飾で，東西の壁までつゞいてゐる(Fig.16)。明窓の左右に，象のになった五層の塔を彫り，門口のわきには踊躍する高髻の門神と菩薩形の供養者とを彫る。明窓と門口とのあひだに，上下二段十六佛龕を整然とならべてゐる。さらに，明窓の左右には，たて一列の佛龕，門口の左右には，層ごとに大龕をつくってゐる。そして，だいたいにおいて六層になった東西壁に連絡してゐる。これらは，あきらかに一樣式である。東西の壁面とも同樣で，一氣につくりあげたことがわかる。やゝほそ手の顏で，頸もとから，なゝめにゑりをつくった中國冠帶式の服制である。しかし，まだ「かけも」はどれにもみられない。さうして，佛龕も拱額だけで，ほかの裝飾はつくられてゐない。これに對し，拱額のうへに帷幕をつくるとか，天蓋飾をつけるとか，またしたに寶壇をつくり，供養者像を彫りつけるとかした，より裝飾的な小龕(50, 51, 53, 54, 55, 58, 78)がある。これらは，あきらかに第二次追刻のもので，時期的にも斷絶があ



第十五圖　南壁東方浮彫塔形
Fig. 15. South Wall, East Storeyed Pagoda in Relief.

ったかとおもはれる。さうして，かういふ佛龕にみられる坐佛には，一様に「かけも」の發達してゐるのがみられる。

南壁に一雙の塔形(Fig.15)をつくることは，めづらしい。第六洞には周壁下層に塔形(本書，第三卷，Pl. 8,30)をめぐらし，第十九洞は，西壁下層に塔形(本書，第十三卷，Pl. 41,58)を彫る。左右一雙の塔は，第十九洞でいへば佛立像の位置(第十三卷，Pl. 12, 13)にあたる。また太和ごろと推定される第十一洞から第十三洞内外の諸龕(第八卷，Pl. 6, 8, 11, 21, 26, 39，第十三卷，Pl. 32, 83, 98, 107)には，左右に一雙の塔をもったものが多い。しかし，それらの佛龕は，左右に塔形(Pl. 2, 3)をつくった第三洞(第一卷，Pl. 69)や第五洞から，逆に影響されてゐるかも知れない。

明窓と門口とのあひだを一區劃として，こゝに十六龕をならべたのは，第五洞が唯一の例である。しかし，こゝを一區としてとりあつかふことはふつうである。第六洞には維摩文殊對問龕(本書，第三卷，Pl. 30)があり，第七，第八洞には供養者群像(第四卷，Pl. 94，第五卷，Pl. 75)があり，第九洞には供養者の屋形龕(第六卷，Pl. 51)があり，第十洞，第十三洞には七佛列像(第七卷，Pl. 41，第十卷，Pl. 13)があり，第十一洞には倚坐佛龕

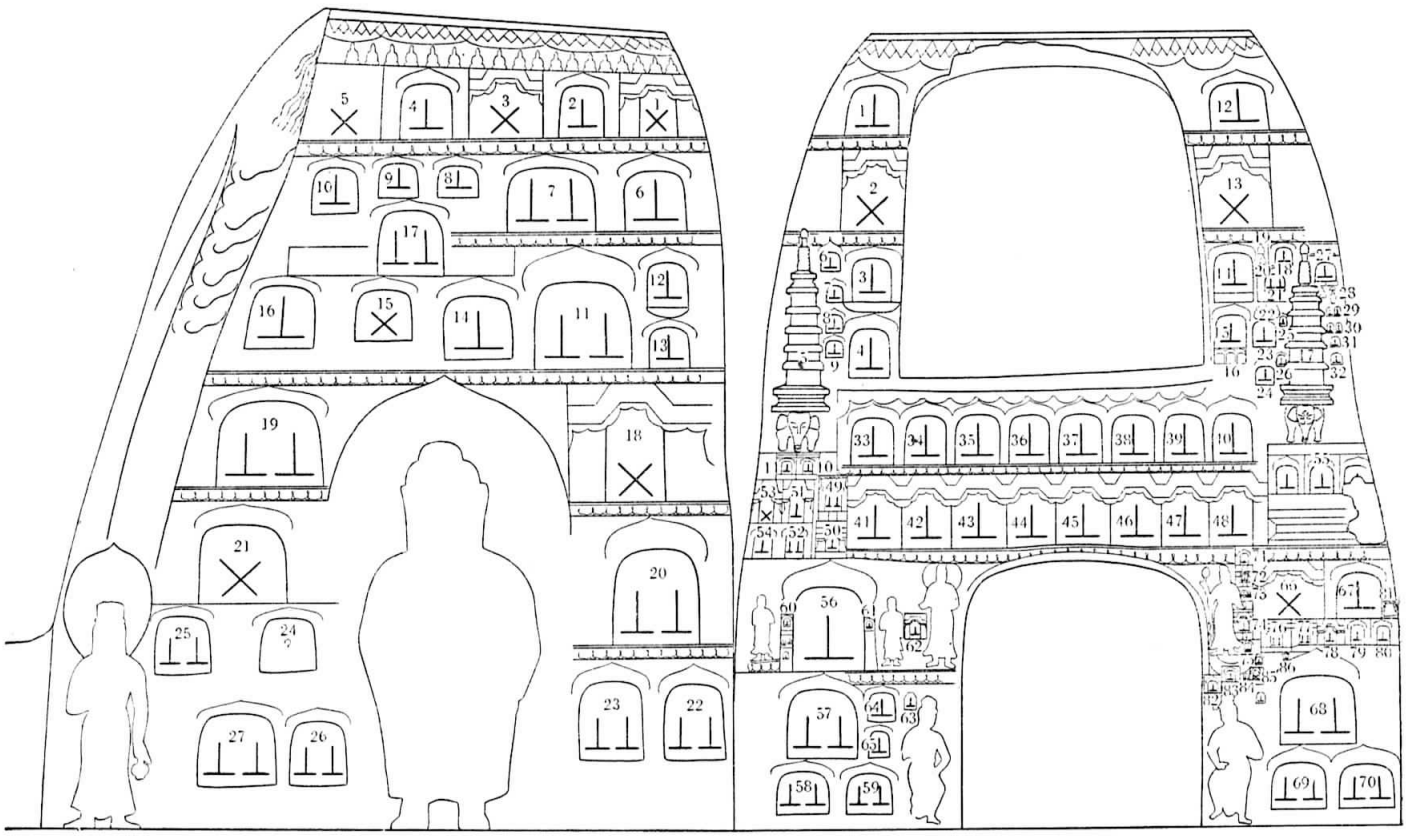
(第八卷, Pl.12)があり, 第十六洞には三佛龕(第十一卷, Pl. 65)があるといふふうである。十六龕十六佛については, 大通智勝佛の世にでた十六沙彌が, のちに十六佛になったといふはなしが想起されるけれども, こゝのは, それと關係なく, ばしょのつがうで十六體になったのかとおもふ。

たゞめづらしいのは門口左右にある高髻形の門神(Plan III)である。このばしょに門神を彫ったのは第九洞(本書, 第六卷, Pl. 51), 第十洞(本書, 第七卷, Pl. 41)以外にみられない。第九, 第十洞では, いづれも, なほ矛をもった武神であったが, こゝのは高髻形で, 武器を全然もってゐない。下裳, 天衣のつけかたもふつうの菩薩, 天人の像にことならない。たゞ踊躍したかたちが, 勇猛形といふにふさはしいだけである。このうへの供養菩薩像の一對は, 第八洞の門口わきにある供養樂天の像(本書, 第五卷, Pl. 75)が, なにかのヒントをあたへたのかも知れない。たゞ, 一對のきはだった大像である點が特異なのである。その天衣と下裳は平面的に全身をおほひ, 衣端はとがって左右にはねてゐる。ひだは階段狀で, 衣文は完全に第六洞ふうである。寶冠, 面貌も纖細なつくりで, 第七, 第八洞乃至曇曜五窟ともすっかりちがってゐる。

南壁諸龕のうちで, いちばん特異なのは西部中層の佛龕(55)である。大きな五成の須彌座に三龕がならび, また寶壇の浮彫像が不規則に配置されてゐる。この佛龕は, これだけ大きな面積をしめしながら, この壁面の一般的樣式にしたがはず, もかけ座式の第二次追刻の佛龕であるのは異例である。その大きな須彌座から判斷すれば, あるひは, はじめに二佛並坐の佛龕が計畫されたかも知れない。それがなにかの事情で變更され, けっきょく, かういふ三小龕がつくられたものであらう。(Pl. 23–38; Plan IV)

〔東壁〕 東壁はひどい風化である。そのうへ大きな龜裂が一本上下にはしってゐる。南壁とのさかひはほゞ垂直で, ほゞ直角にまじはってゐる。しかし, 北壁へは自然に移行して, さかひはない。たゞ東壁も北壁も, うへにゆくほど, まへにかたむき, 半ドゥム狀になってゐる。北壁とのさかひは, 便宜上その大光背のはしをもってしよう。左の脇菩薩は光背のしたにあらはされ, むしろ北壁に屬してゐるが, 左の脇侍佛は大きく東壁の中央にたってゐる。たゞおしいことに, いまあるものは, みなあたらしい泥像である。おそらく, 康熙三十七年(A.D.1698)の修理であらう。

壁面は最上に坐佛の列像があり, 三角垂飾と弧狀帷幕の天蓋かざりがある。これは南壁と同樣である。それよりしたは, 蓮瓣帶をもって整然と六層にわけてゐる。そのうち, うへ三層は明瞭に, した三層は門口にほゞ照應してゐる(Fig. 16)。したの三層は脇佛によって切斷され, 南部と北部とにわかれてゐる。北部の第一層は不明, 第二層の上半は交脚楣拱龕(21), 第三層は二佛尖拱龕(19), 南部の第一層は二佛尖拱龕二(22, 23), 第二層は二佛尖拱龕(20), 第三層は交脚楣拱龕(18)である。第四層は大きく二佛尖拱龕(11)があり, その南に坐佛尖拱龕が上下に二つ(12, 13)あり, その北に坐佛尖拱龕(14)と交脚尖拱龕(15)があり, また坐佛尖拱龕(16)がある。こゝだけはちょっと不規則であるが, 交脚龕(15)のうへに二佛尖拱龕(17)が彫られてゐる。第五層は南から坐佛尖拱



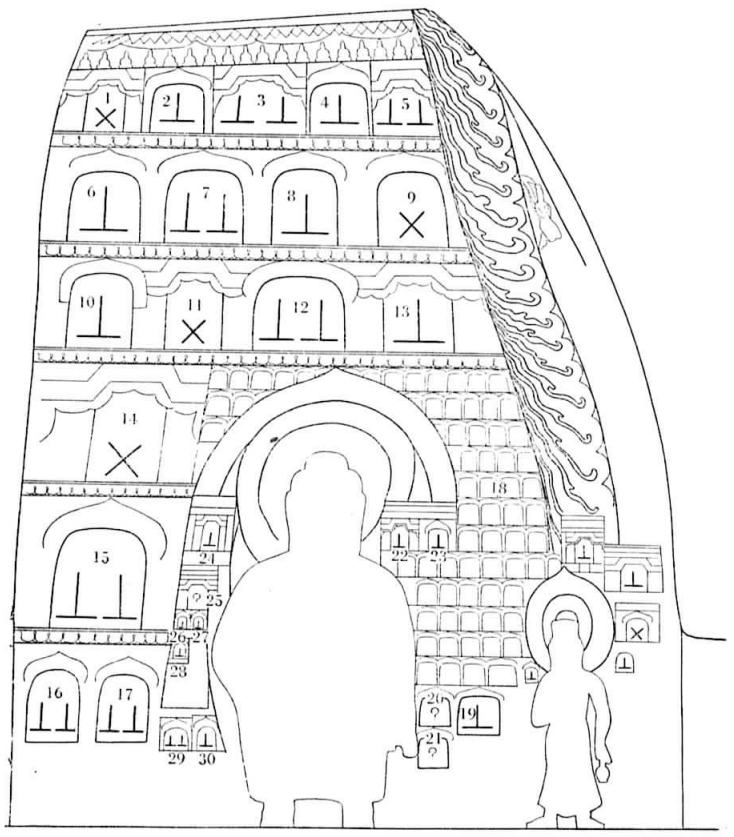
東壁 East Wall　　南壁 South Wall

第十六圖 第六洞南壁および東西壁佛龕配置圖

龕(6)，二佛尖拱龕(7)があり，やゝ小さい坐佛尖拱龕が二つ(8, 9)あり，つぎに坐佛尖拱龕(10)がある。第六層は交脚菩薩(1, 3, 5)と坐佛(2, 4)とを交互においてゐる。交脚菩薩はもとより楣拱龕，坐佛は尖拱龕であるが，いちばんおくの交脚菩薩龕(5)だけは，楣拱であることがたしかめられない。むしろ尖拱龕のやうにもおもはれる。西壁ではかうした異例が多いが，東壁はたゞ，このひとつだけが異例である。これらの佛龕のうちで，第四層の大龕(11)と上下二龕(12, 13)と，第三層の交脚龕(18)が，やゝよくのこってゐる。それによると，いづれもほっそりした尊像で，南壁諸像よりもきゃしゃである。したがって，南壁よりは，あとからできたやうにおもはれる。(Pl. 39, 40, Plan V)

〔西壁〕 西壁は完全に東壁に對應する。うしろが第六洞で，丘から隔絶されてゐるため保存がひじゃうによい。南壁とのさかひはほゞ垂直にたち，北壁の方からは，本尊の大きな光背がのしかゝってくる。西壁自身も，このあたりでは，つよくまへにのめってゐる。右脇菩薩は大光背の下端にあらはれ，右脇侍佛は，ほゞ壁面の中央に大きくつくられてゐる。もとより，左の脇侍佛と同樣に，康熙三十七年(A.D.1698)の泥像であるが，光背はまだ，ほゞ完全にのこってゐる。それは，やゝこまかい細工の火焔光である。こゝの光背から，うへにむかって一本の大龜裂がある。これは天井にのぼり，つひに東壁の龜裂につながってゐる。

上下は蓮瓣文帶で六層にわかれ，最上には坐佛列像と天蓋かざりとがある。第一層(Fig. 16)は二佛尖拱龕二(16, 17)，これはかなり風化して，像は泥作である。第二層も二佛尖拱龕(15)，第三層



西壁　West Wall

Fig. 16. Distribution of Niches on South, East and North Walls.

は交脚楣拱龕(14)である。こゝまでは完全に東壁に照應してゐる。しかし，脇佛立像の北部は東壁とちがひ，第一層のほかは千佛龕(18)になってゐる。第一層は大きな尖拱龕(19)があり，ほゞその構成がみとめられるが，このほかにも，二三の尖拱龕があったらしい。

第四層は南から坐佛尖拱龕(10)，交脚楣拱龕(11)，二佛尖拱龕(12)，坐佛楣拱龕(13)といふふうにならんでゐる。第五層は坐佛尖拱龕(6)，二佛尖拱龕(7)，坐佛尖拱龕(8)，交脚尖拱龕(9)とならび，第六層は交脚楣拱龕(1)，坐佛尖拱龕(2)，二佛楣拱龕(3)，坐佛尖拱龕(4)，二佛楣拱龕(5)となる。みな東壁同様の，やゝ痩身の像で，中國衣冠式の服制である。内衣の帶はたれさがってゐるが，「かけも」はまだ發達してゐない。全部ほとんど一様で，一氣にしあげられたことがわかる。たゞ，この壁面で注意すべきことは，第四層の坐佛楣拱龕(13)，第五層の交脚佛尖拱龕(9)，第六層の二佛楣拱龕(3, 5)のごとく，異例の佛龕が頻發することである。第四層は尖拱龕を交互におき，第五層は尖拱龕ばかり，第六層は楣拱龕と尖拱龕とを交互におき，そのかぎりでは實に整然たる佛龕の配列である。しかるに，うへの四龕(3, 5, 9, 13)に，なぜ，かやうな異式の尊像をおさめたか，これは疑問である。東壁では，さきに注意したごとく第六層北端の一龕(5)だけが，異例であるらしい。なほ第五層の交脚佛像は第七洞，第八洞にも例のあることだが(本書，第四卷，Pl.55, 71，第五卷，Pl.49)，このやうに尖拱龕におさめられたことはない。

うへ三層にはさすがに追刻小龕はない。たゞ下方，ことに右脇侍佛のまはりに，それが密集してゐる。脇侍佛の左肩に二龕(22, 23)，右肩に一龕(24)，右わきに六龕(25–30)以上がみとめられる。みな纖細きゃしゃな式で，南壁の追刻小龕と同様，第二次的なものであることはあきらかである。そのうちの三龕(22–24)だけは，やゝ「かけも」が發達してゐる。(Pl. 41–49, Plan VI)

第三章　北壁 天井 隧道

〔北壁〕 北壁は，いっぱいに本尊の大火焰光がひろがり，天井のまんなかにまでおよんでゐる。

光背のすそに小さく脇菩薩の立像があり，そのうちがはに背後の隧道への口があいてゐる。菩薩像はどちらも康熙の泥作で，原形をしのばすものは，たゞ右脇侍菩薩の寶珠形頭光と三角飾の寶冠(Pl. 57)のみである。頭光は唐草文の外縁をもち，蓮華文の中心を有し，めづらしい形式である。

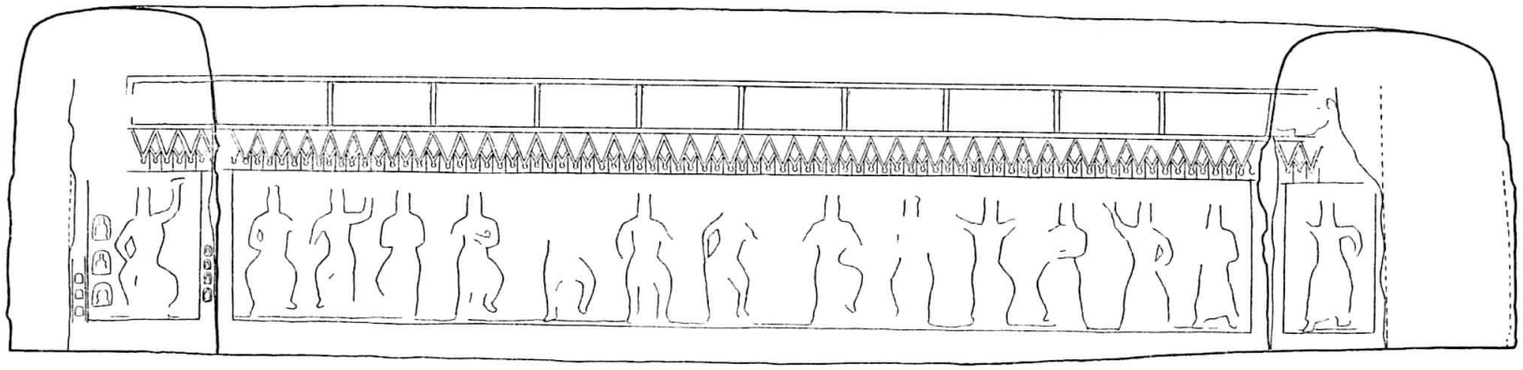
本尊光背はひどくいたんでゐる。けれども，西部外縁の二重の火焔は，よくのこってゐて，壯大である。そとの火焔帶は，もとより身光の外縁であり，うちの火焔帶は頭光の外縁である。どちらも第二十洞大佛の火焔(本書，第十四卷，Pl. 20)によく似てゐる。頭光火焔のうちは，まづ供養飛天列があり，つぎに坐佛列があり，また坐佛列(Pl. 52)がある。さうして，そのまんなかが蓮華文である。第二十洞大佛光背にくらべると，帶圈がせまく，その數が多い。擧身光のなかは供養飛天列があり，肩には火焔がある。

本尊は，この光背のまへに，結跏趺坐で泰然とすわってゐる。右の足さきが，つよく左の股を壓してゐるのがみえる(Pl. 39)。禪定の手は，まへにかさねてくんでゐる。拇指をすこしあげてゐるので，拇指と第二指とのあひだに三角形の孔ができてゐる。全身うすい泥をもっておほひ，金紙をはってゐるのであるが，みるところ，だいたいの原形はのこってゐるらしい。大きな膝，大きな腕，はった肩に當時の氣迫がしのばれるが，衣文はまったく，かはりはてゝゐる。たぶん，西壁諸尊にみるやうに，階段狀の衣文があり，兩肩から胸になゝめのゑりが，さがってゐたことゝおもふ。したがって，面貌もほゞ舊態を存してゐて，紙と泥とのしたに，偉大な北魏の原形がしのばれる。たゞ螺髮は完全に後世のもの，膝下の蓮瓣もあたらしい。もっとも，すそはすこしうまってゐるから，そこには，もとの蓮瓣の座が，痕迹をのこしてゐるかも知れない。

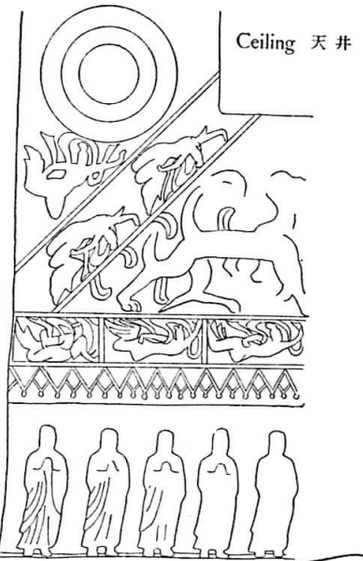
いま大佛のまへにならぶ塼壇と泥像の諸尊は，みな近世のものである。おそらく康熙ごろのものであらうが，後列の一尊だけは，明代にさかのぼりうる佛像とおもふ。(Pl.50–56, Plan VII)

〔天井〕 天井は大きく，不規則な楕圓形をなす。本尊大光背は北壁からのびて，天井の三分の一ぐらゐまで，くひこんでゐる(Plan II)。南がはの一邊は，また胴がはりだして，まんなかは，すこしうちにくひこんでゐる。全面風化して，ひどく剝落するが，周邊にそうて飛天の列像のあったことがわかる。なほ光背のふちにそうて，龍脚のごときものがみられる。おもふに，第十二洞の天井(本書，第十卷，Pl.48)にみるごとき交龍があったことであらう。(Pl. 57)

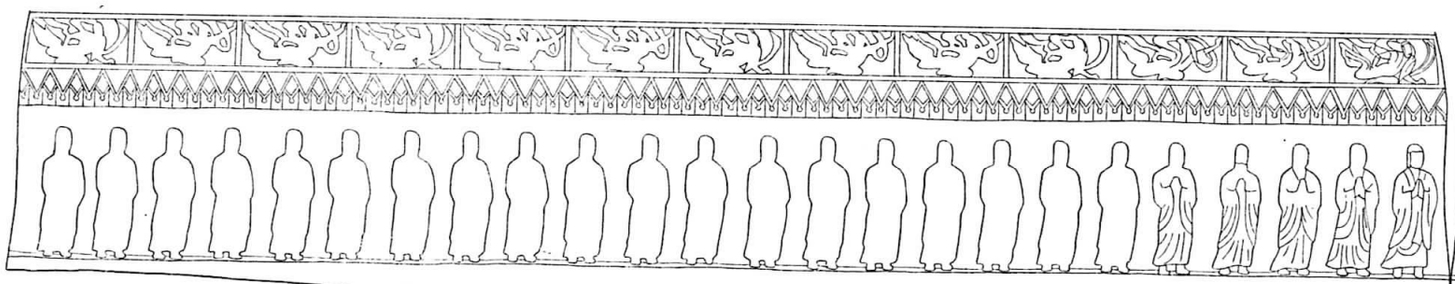
〔隧道〕 隧道の入口(Pl.55)は本尊光背のした，脇侍菩薩のうちがはにある。すっかり風化してしまって，原形はまったくわからない。こゝからはいると，コの字形になって，北壁と南壁と，それに東口の東壁と西壁と，西口の東壁と西壁にわかれる。たかさは約4.00 m，床はすこしうまってゐる。天井は，かすかに彎曲して，かまぼこ天井である。西口西壁から北壁，東口東壁にかけて，僧形の行列がある。合掌して東方にむかひ，もすそをひき，右繞(pradakṣiṇa)の禮(Fig. 17)を修するごとくである。行列のうへには，三角垂飾とひだのある帷幕との天蓋かざりがある。そのうへには欄間のやうな框ぐみがあり，ひとつひとつに飛天を彫ってゐる。天衣をはね，もすそを大きくひるがへした飛天で，



South Wall of Passage 隧道南壁



Ceiling 天井



North Wall of Passage 隧道北壁

East Wall of Passage 隧道東壁

0 5 10 m

第十七圖 第五洞隧道壁面および天井　　Fig. 17. Cave V, Passage, Walls and Ceiling.

東の方にむかってとんでゐる。

これに對し，大佛の背後にあたる南壁には，踊躍してゐる供養者の行列がある。脚をあげて踊躍してゐる。あまり風化がひどいので，天人形であるか，武神形であるか，區別がつかないし，上部の裝飾がすっかりわからない。東口西壁，西口東壁はこれも踊躍形で，手をあげてゐるので，武神かとおもはれるが，斷定はできない。天井の風化はもっともひどい。一部分に飛天がみえ，龍脚がみえ，蓮華がみえてゐる。しかし，その全體の構成は察知しがたい。(Pl. 58–60)

第四章　第五洞外窟龕

1. 第五A洞

〔外壁〕 位置は，さきにいったやうに，明窓の西方上部にある。外景は第三十五洞，第三十九洞(本書，第十五卷，Pl.62,75)のごとく尖拱形をつくり，左右に金剛力士とみられる門神像を彫る。大きな鼻，齒をむきだした口，角ばった眼，それに寶冠をむすんだ紐が大きくたちゆれて，勇猛形であることは確實である。だが，身體の部分は破滅してみえず，金剛杵(vajra)の有無もたしかめがたい。尖拱額には，わりにどっしりした七佛の像があり，拱端には獸形がつくられてゐる。拱額の兩わきに多面多臂の像があり，どちらも鳥形にのってゐる。さらにそのうへは合掌供養像である。(Pl. 62A, Plan VIII)

〔北壁〕 この北壁は龕形をなさず，大きな一光三尊佛をつくる。まんなかの坐佛は大きく，頭部，兩手に破損はあるが，ほゞ完存し，身體つきも堂々としてゐる。衣は全身をおほひ，臺座に大きくひろがる「かけも」は實に雄大である。ひだは階段狀で，やゝ平面的にとゝのへられてゐる。衣は兩肩からゑりのやうにさがり，內衣の帶が胸まへにたれてゐる。やゝながめの，したぼそりの顏だが，量感はかなりある。(Plan IX)

ほそい，やさしい脇菩薩が左右にたつ。大きな蓮華やうの座をふまへ，やゝほっそりした寶珠形の光背をおふ。天衣は，兩肩をおほふてさがり，したまへで交叉し，大きな環がはめられてゐる。下裳は，すこしまげられた腰をつゝみ，いかにも動的であるとともに，左右にひらいた大きな足はどっしりとして，安定感をあたへてゐる。右の脇侍は頭部だけのこして破損し，こゝに本洞に通ずる大きな孔(Pl. 25, 27)がみられる。本尊の光背は無地で，天井のなかばに達してゐる。外緣の火焰は，みな近世の彩色である。脇侍の頭光のそとに，小さく比丘の供養者が上身をあらはしてゐるが，一方は老年相，一方は壯年相につくられてゐる。これは，いふまでもなくマハァカァシヤパ(Mahā-Kāśyapa)(大迦葉)とアァナンダ(Ānanda)(阿難)とをあらはしたものである。(Pl.61–64, Plan IX)

〔南壁〕 南壁のまんなかに大きな拱門の入口がある。うへは坐佛の列龕，それに三角垂飾のか

ざりがある。左右はどちらも佛の立像，そのうへは象にのった菩薩像と，馬にのった太子像である。あきらかに普賢菩薩(Samantabhadra Bodhisattva)と出家踰城のシッダァルタ(Siddhārtha)太子である。馬の脚をとって空中をかけてゐるのは，いはゆる淨居天(Śuddhavāsa)たちである。佛の立像のうち，一方はアショカ(Aśaka)王の前身である子どもたちから，土でつくった食物をうけてゐる釋迦牟尼佛(Śākyamuni Buddha)であり，一方は儒童(Māṇava)の布髮供養をうけてゐる定光佛(Dīpaṃkara Buddha)である。かういふくみあはせは第十九洞の諸佛龕(本書，第十三卷，Pl. 66, 67)でも，西方第二十八洞(第十五卷，Pl. 33 A)でもみいだされる。(Pl. 65–67, 78 B, Plan IX)

〔東壁と西壁〕　東壁は交脚菩薩の楣拱龕，西壁は佛の坐像をおさめた尖拱龕である。どちらも，うへには三角垂飾の天蓋かざりをもつ。寶壇にはかざりはないが，西壁には，たゞ博山爐をさしあげた侏儒を小さく彫ってゐる。坐佛龕の本尊は頭部をうしなふが，交脚龕の方は手さきを破損するのみで，ほとんど完存し，實にうつくしい。くらべると東壁の方がしっかりしてゐるやうだが，「かけも」のつよくはねた調子は，よく似てゐる。折りたゝみふうの楣拱額はめづらしいが，例のないものではない。坐佛の左右は，侏儒にさゝへられた脇侍たちであるが，そのうへには維摩居士(Vimalakīrti)と文殊菩薩(Mañjuśrī)の對問像がある。(Pl. 68–75, Plan IX)

〔天井と床〕　天井は格間になってゐる。といふものゝ，まんなかに大蓮華文があり，のびあがった本尊の光背があって，周邊にならんだ八つの格間がみえるのみである。蓮華は二重になり，そとは複瓣，うちは單瓣である。格間ごとに飛天を彫り，みな樂器を奏してゐる。そのうち東北の二體は一組になり，一人が太鼓をさゝげ，一人が撥でたゝいてゐる。つぎは小鼓，つぎは腰鼓，つぎは横笛，排管，竪笛，螺貝といふ順序になってゐる。(Pl. 76–78 A)

床には線刻の蓮華文が五つある。中央は大きく，五瓣で，四方は小さく，四瓣からなってゐる。(Pl. 64 B, Plan VIII)

2. 第五B洞

〔外壁〕　さきのA洞によく似た小窟である。外壁も同樣な尖拱額がみとめられるが，破損のため力士像も多臂神もみえない。(Plan X)

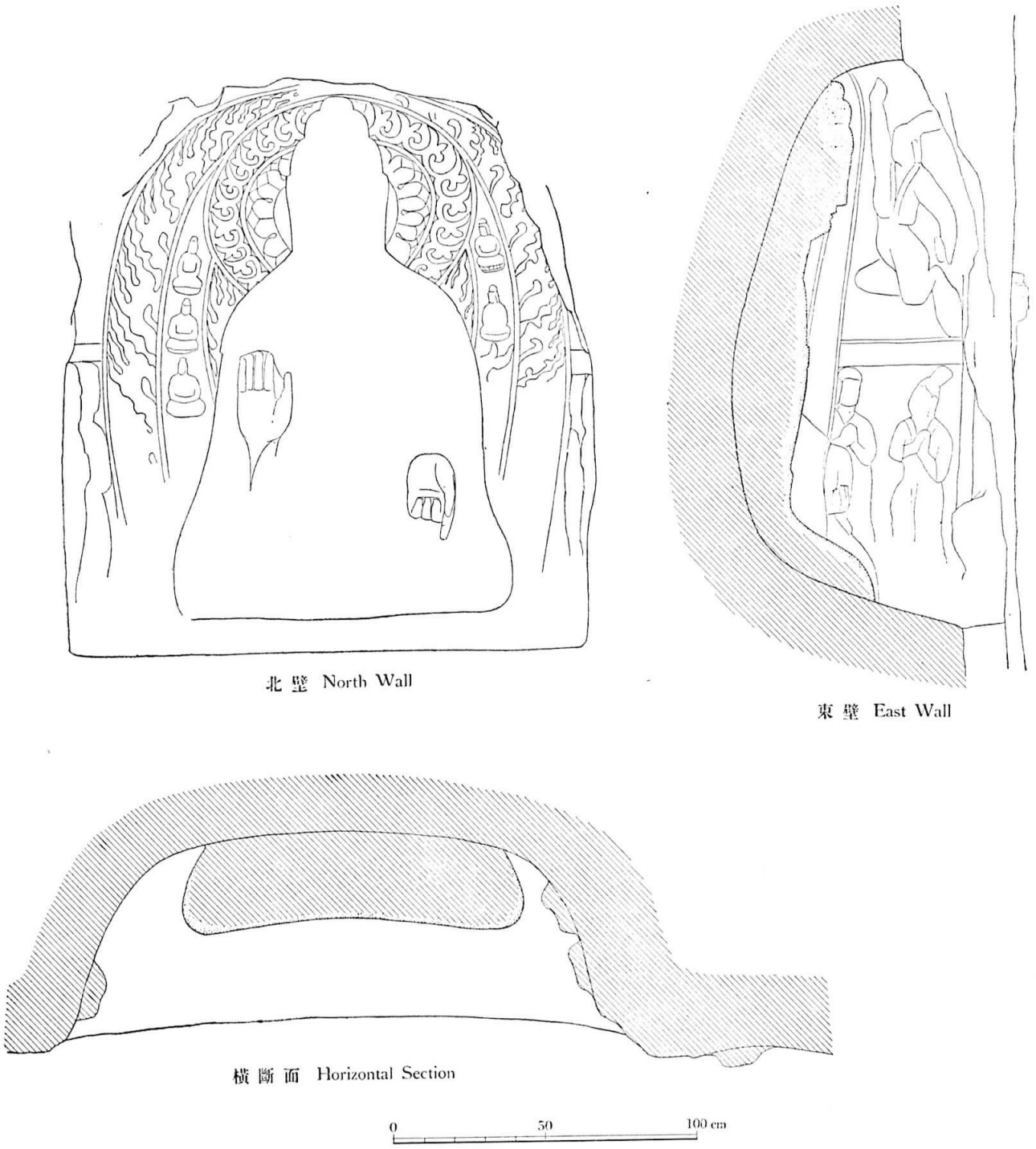
〔北壁〕　この北壁は，A洞と同樣に一光三尊佛である。素文の擧身光が大きく北壁をおほひ，天井の中央にまで，のびあがってゐる。おしいことに，本尊は顏と兩手をいためてゐるが，がっちりした體軀に，「かけも」が發達し，かなり堂々としてゐる。ひだは階段狀で，全體はいたって平面的である。脇侍二體は完存し，すらりとした瘦身の立像である。かるく腰をひねったあたり，まことに輕妙である。頭光のうへに比丘像があって，五尊像になることもA洞におなじである。(Pl. 79, 80)

〔南壁〕　南壁もA洞とすっかりおなじである。うへに坐佛列龕があり，天蓋かざりがあり，右に儒童と定光佛の像があり，左うへに象にのった菩薩像のあることまでおなじである。たゞ左にあ

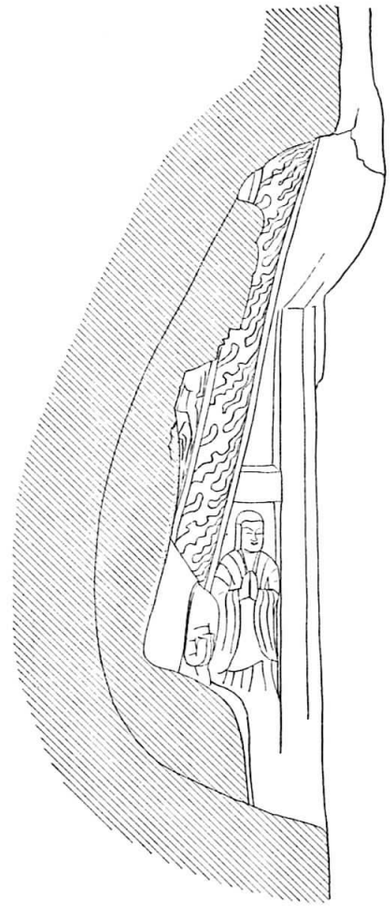
る佛立像は童子がゐないため，はたしてアショカ王前身の供養する釋迦佛であるかどうかわからない。右うへは破損して騎馬像がみえない。(Pl. 81, Plan X)

〔東壁と西壁〕 これもA洞におなじく，東壁は交脚楣拱龕であり，西壁は坐佛尖拱龕である。尊像の配置も，まったくA洞におなじである。たゞ西壁拱額上の供養者たちが一列でなく，二列になってゐる點がちがふ。それはこの石窟の佛龕がやゝ小さいため，上部に空白が多くなったからであらうとおもふ。作ゆきは，總じてA洞よりも，おとってゐる。(Pl. 82–84, Plan X)

〔天井〕 この天井はせまく，1.20mに0.60mぐらゐ，格間はない。たゞまんなかに蓮華文，東西に

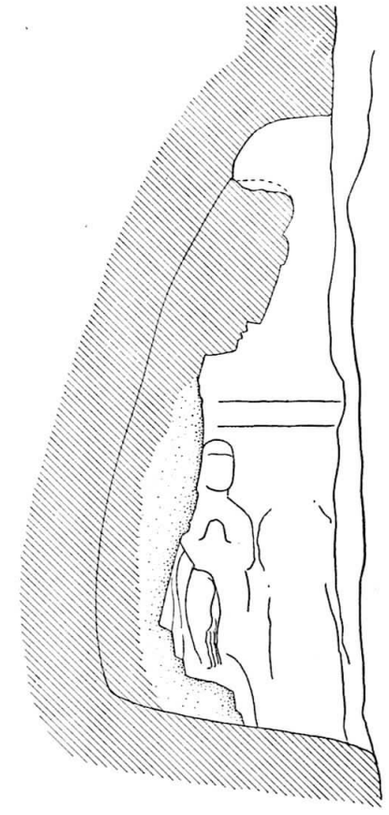


第十八圖 外壁第五a龕測圖 Fig. 18. Outside Wall, Niche Va.

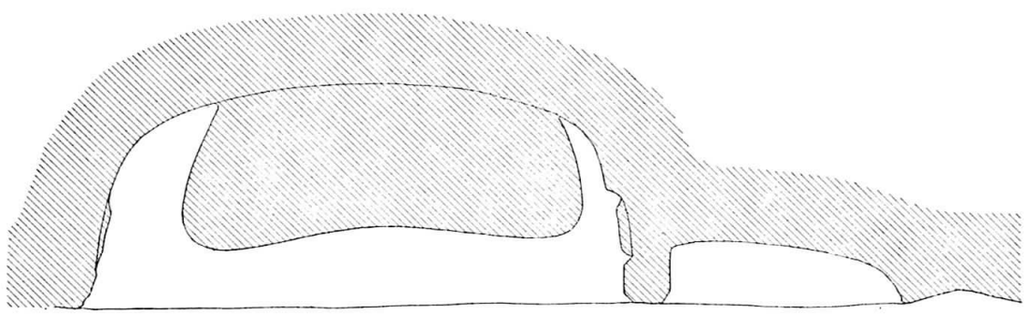


東壁 East Wall

北壁 North Wall



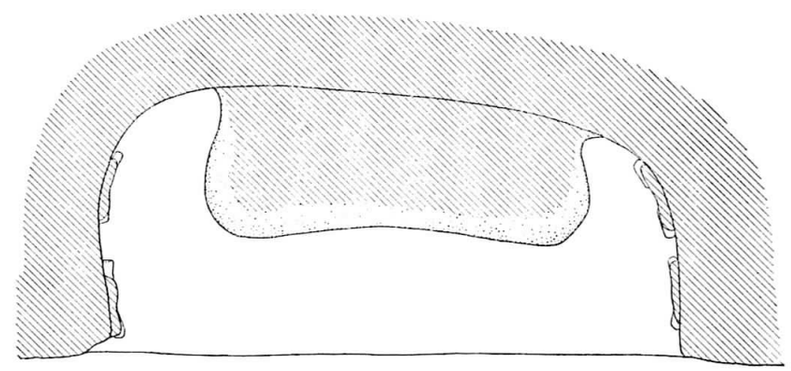
東壁 East Wall



横斷面 Horizontal Section

0 50 100 cm

第十九圖 外壁第五b龕測圖 Fig. 19. Outside Wall, Niche Vb.



横斷面 Horizontal Section

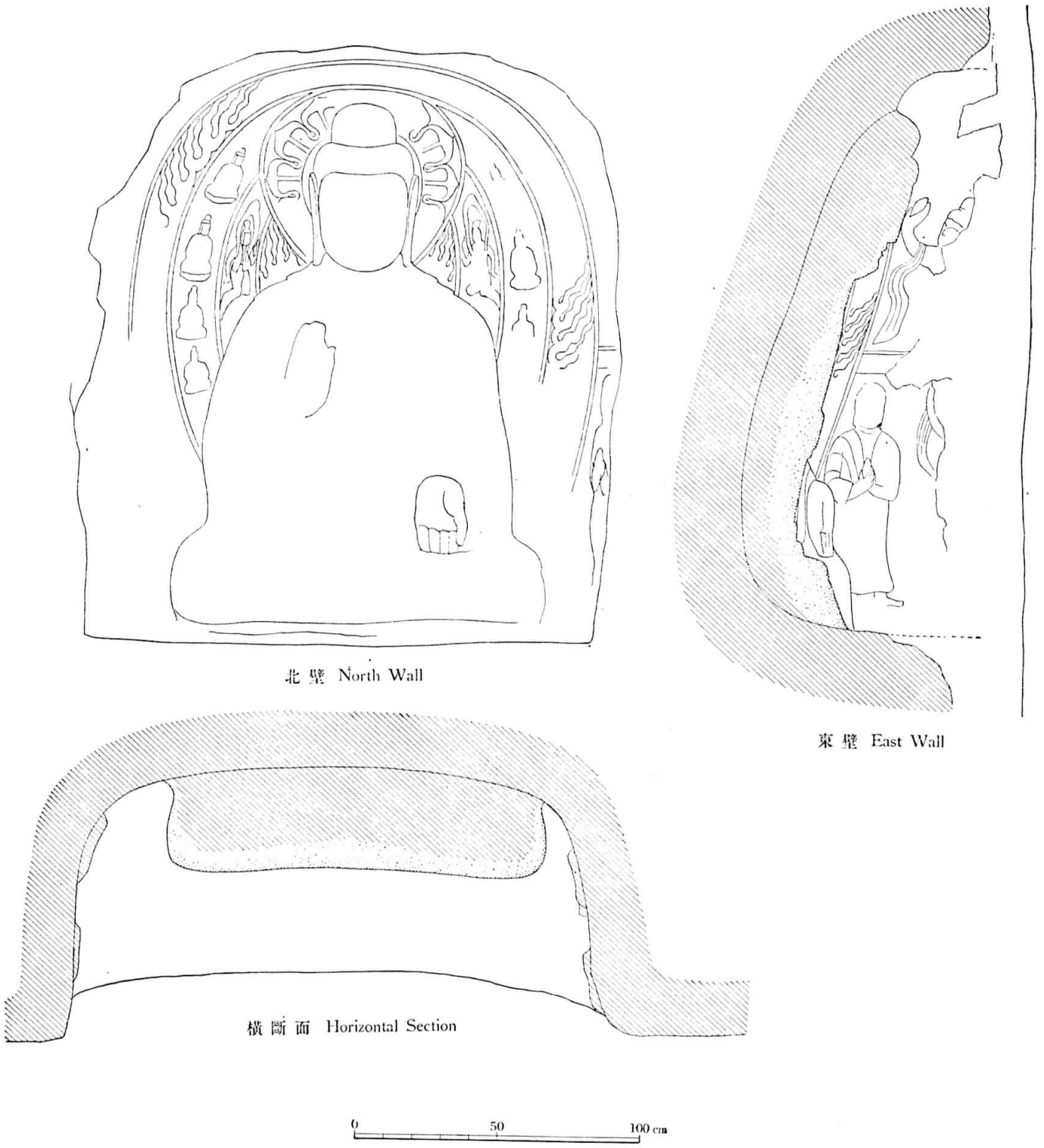
0 50 100 cm

第二十圖 外壁第五c龕測圖 Fig. 20. Outside Wall, Niche Vc.

それぞれ相よる二體の飛天を配するのみ。いたって簡略である。(Pl.85, Plan X)

3. 第五 a–d 龕

明窓の四方に四つの佛龕がある。いづれもあさい佛龕で，それぞれ坐佛一體をおさめてゐる。光背が大きく龕内にひろがり，左右のはしに一二の供養者があさく彫られてゐる。佛龕 a の坐佛は

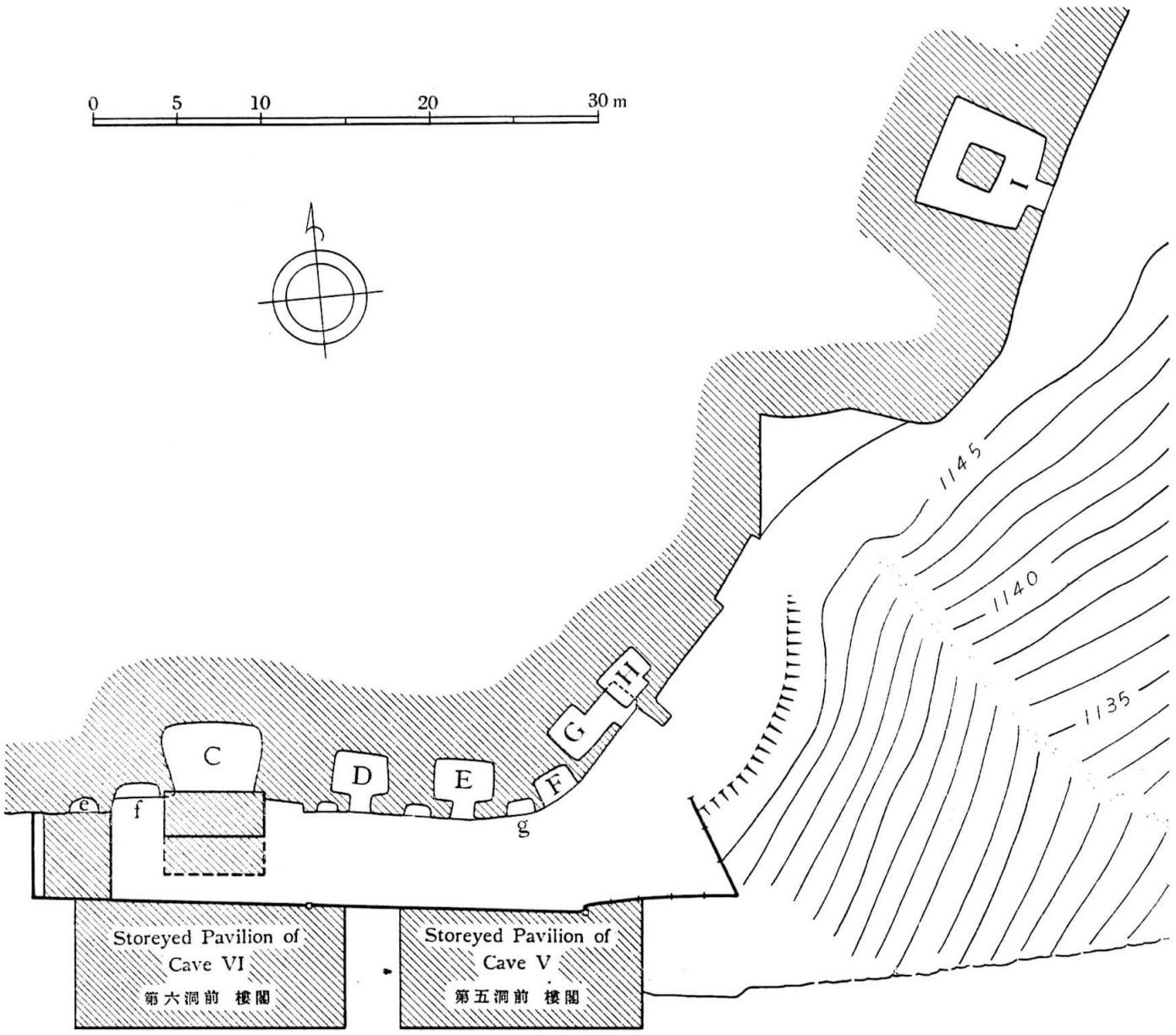


第二十一圖 外龕 第五b龕 測圖　　Fig. 21. Outside Wall, Niche Vb.

すっかり泥で補修されてゐるが，佛龕bとcとの坐佛は，頭部がよく保存されてゐて，うつくしい。衣文はおそらく洞内の諸尊とおなじであったらうが，わりにあつみがあり，顔もまるい。火焔光背のできも雄大で，わりにはやくつくられたことを暗示してゐる。A洞，B洞より古く，おそらく明窓千佛龕とおなじころに，つくられたものとおもふ。(Pl. 86, Fig. 18–21)

4. 第二段石窟

第五洞四層樓からうへにでたところに，せまい平地があり，ひくい岩壁がある。いまこれに若干の窟龕がひらかれてゐて，略測圖 (Fig. 22) にしめすとおりである。第一卷，Map 2 では僧房をおとしたが，こゝにはあたらしい小屋がある。第五C洞は第六洞上の石窟で，洞口のたかさ約5.15 m，



第二十二圖　第五洞 第二段石窟 平面圖　　Fig. 18. Plan of Second Terrace, Cave V.

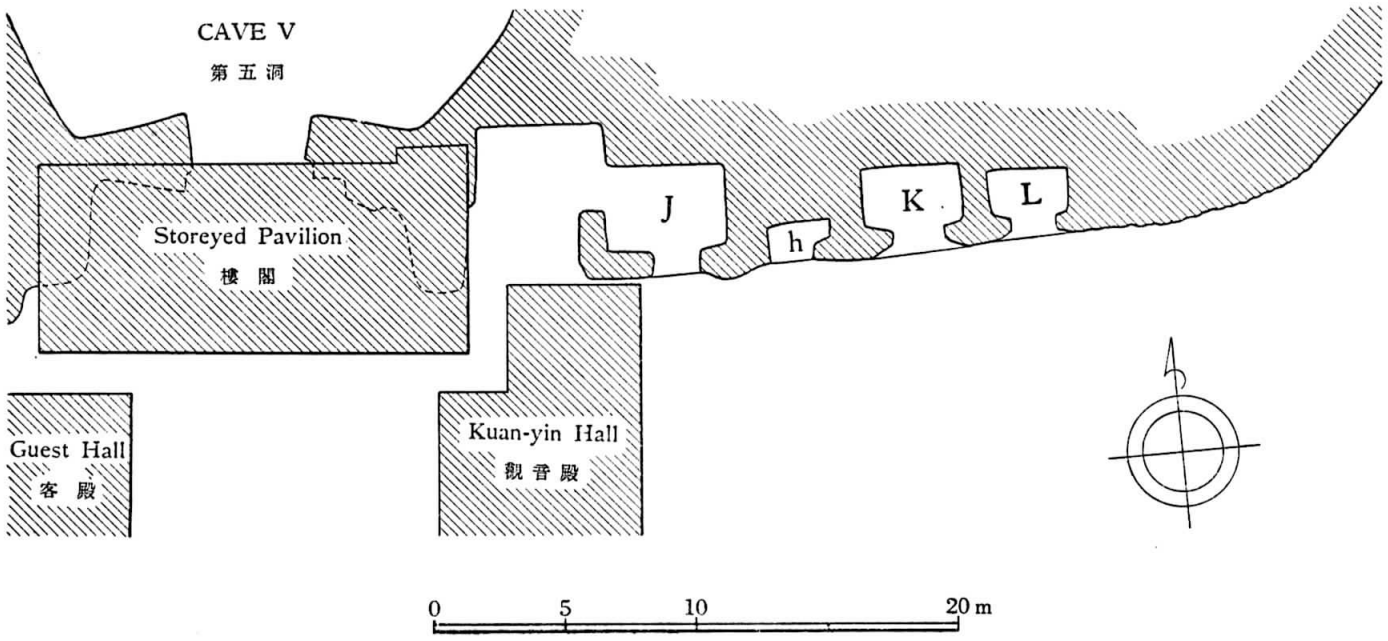
ふかい龕形をなし，北壁に泥の坐佛がおさめられてゐる。

第五D洞はたかさ2.70mの小窟である。三壁にそれぞれ小龕がある。第五E洞はたかさ2.30mの小窟で，三壁の三龕がふかいのが特色である。第五F洞はたかさ1.63mの小窟で，よく似た造像形式である。たぶん第五A洞，B洞とおなじころにできたものであらう。これから東に第五G洞，H洞があるが，G洞には第四洞にみたやうな小さい方形の明窓（本書，第一卷，Pl.102）があり，H洞はこれより床が0.80mばかりたかい。洞高，前者は2.90m，後者は2.00mである。

やゝはなれて，方柱のある小窟，すなはち第五I洞がある。これは未完成である。(Pl.87, 88)

5. 第五洞東方石窟

第五洞に接して，その東方に二三の小石窟(Fig.23)がある。觀音殿のすぐうらにあたる石窟，すなはち第五J洞はわりに大きく，たかさ6.25m，北壁に第四A洞東壁（本書，第一卷，Pl.114）にみるやうな交脚菩薩の大きな像が泰然とすわってゐる。その東に小龕hがあり，つぎに小窟，第五K洞とL洞とがある(Rub. IVA)。



第二十三圖 第五洞東方石窟平面圖　　Fig. 23. Plan of Eastern Caves, Cave V.

終　章

第五洞の特徴

1

第五洞の特徴は，なによりも坐佛の大像を本尊としてゐることである。坐佛の大像を擁した石窟は，雲岡では第十九洞と第二十洞である。いづれも曇曜五窟中の石窟である。第十洞はいま坐佛を本尊としてゐるが，もとは交脚菩薩像であったとおもはれる（本書，第七卷，p. 66）。いまこれらの三洞—第五，第十九，第二十洞—を比較してみるに，坐像が大きく膝をはり，石窟内のほとんど全面積を占めてゐることは共通である。したがって前壁の左右がつよく張り，前壁が凸曲するとともに，左右壁がなゝめにはしり，せまい後壁につらなるといふ，雲岡獨特の石窟プランができあがる。ざっといへば，梯形のプランといへようが，ひじゃうに不規則で，ゆるく彎曲し，壁面の交叉はない。つまり，窟内に大きくすわった大佛の膝に，一定の間隔をおいてまはる壁面からなるのである。抽象的な方形とか，圓形とか，何々形でなく，具體的な大佛のすわった形といふものが，これら雲岡石窟のプランをきめる基礎である。

後壁もまた獨立してゐない。大佛の擧身光そのものが後壁になって，そのまゝの曲線で左右の壁に連續する。このことは，立像の窟でも，倚坐像の窟でも，原則的にちがひはない。一言にしていへば，佛像本位にひらかれた石窟空間である。石窟の形體がさきにあるのでなく，佛像を彫りだすのに必要な—最小限度の—空間が，石窟である。

しかし，第五洞と第十九，第二十洞とを比較すると，やはり第五洞がいちばんゆったりしてゐるといへようか。第十九洞は脇佛も脇菩薩もなく，たゞ坐佛だけの空間である。第二十洞は脇佛はあり，脇菩薩はあるが，いかにもせまい壁面におしこめられてゐる。第五洞のばあひには，いくらか既成の石窟形式といふものが頭のなかにあったやうである。そのうへ背後に繞道（pradakṣiṇa）のできるやうに隧道をつくってゐる。これは第九，第十洞に一致し，またバァミヤァン（Bāmiyān）やキジィル（Kizil）の石窟にも共通したものがある。第十九，第二十洞がなぜ隧道をつくらなかったかはあきらかでない。さういふものを知らなかったのであらうか，さういふ修禮を必要としなかったのであらうか，あるひは全然さういふことを欲しなかったのであらうか。いづれにしても，かれらが，大佛本尊をつくることに意欲を集中したことがわかる。第五洞になって，計畫にいくらか，ゆとりができてきたのである。大佛

のほかに隧道をかんがへ，周壁のほかに明窓や門口の造形をかんがへたのは，西隣の第七，第八洞，第九，第十洞の影響といふこともかんがへられるが，それよりも第五洞のおくれてできたためであらう。

第五洞坐佛は兩手をまへでくんで，いはゞ禪定の佛である。それは第二十洞坐佛に一致する。第十九洞の坐佛は胸に右手をあげ掌をみせ，膝に左手をおいて衣端をにぎってゐる。いはゞ擧手形で，對外的である。禪定形の內省的なかたちに相對する。だから，第十九洞と第二十洞の坐佛は，その意味から一對かも知れない。第五洞の禪定形に對し，第六洞方柱南面の坐佛が擧手形であるのは，たがひに呼應したものかも知れない。いったいに，第六洞は，擧手形が多く，禪定形はほとんどない。北壁下龕にある泥像の禪定形は，もとより信ずるに足りない。

いま本尊の坐高15.02 mは，漢尺になほして約六十三尺あまりになる。北魏の尺もほゞおなじとみとめられるが，その足もとがすこしうまってゐるとみて，身長は，その倍約百三十尺といふことになる。つまり，佛身丈六の約八倍にあたる大佛である。『魏書』釋老志の著者，魏收は，最初の雲岡五佛の最大を八十尺，つぎを七十尺といって，佛の法量といふものを意識してゐないやうなかき方であるが，監修者か，工人はこれを意識し，嚴格ではないけれとも，とにかく佛身八倍の大佛をつくったのかとおもはれる。

いま第五洞の本尊がすっかり泥をかぶってゐるため，こまかい形式上の比較をすることはできないが，いくらかかたさ，するどさがとれて溫雅になってゐることはたしかである。第一に第十九，第二十洞ほどのたくましい面貌はしてゐない。それに服裝はすっかりかはって，中國冠帶式の衣制である。そのことは周壁の佛像をみれば，いっさうたしかである。第十九，第二十洞の西方的な衣制とは對蹠的である。さうして，このことから，第六洞と一括して，西方諸洞との比較が問題になる。

2

第五洞は，いまいったやうに，大像を中心にした石窟であるが，西どなりの方柱を中心にした第六洞とは一對である。それは，その外壁にひとそろひの塔形をもってゐることによって，あきらかである。そのうへ，大きさといひ，樣式といひ，完全に一致し，一對の同時作であることが明白である。一般にいって初期佛敎では，佛像よりも佛塔が崇拜の中心であった。それがのちには佛塔よりも佛像の方が一般化するのであるが，この時代はちゃうど，そのかはりめであったといへやうか，それともまた，石窟は塔中心の古い傳統を，ながくたもってゐたためであらうか，わりあひに塔廟窟がある。それで，こゝでは，ちゃうど法隆寺が尊像をおさめた金堂を左にし，塔廟である五重の塔を右にしたやうに，尊像窟第五洞を左にし，塔廟窟第六洞を右にしたのである。これは，一對窟の多い雲

岡でも，めづらしい組みあはせで，たゞひとつの例である。

つまり，第七，第八洞の一對窟でも，第九，第十洞の一對窟でも，乃至は第一，第二洞の一對窟でも，みな同形の石窟が一對になってゐる。たゞ第五，第六洞だけは尊像窟と塔廟窟とが一對になるのである。だから，プランについてみても，梯形にちかい圓形と方形とのちがひがあり，天井についてみても，ドゥム的なものと平頂のものとのちがひがある。たゞ壁面を整序して，佛龕を配置することだけは，兩者に共通である。またそれに，安置される佛像の諸形式は，まったくよく一致し，ひとつの單位として，曇曜五窟や第七，第八洞や，乃至は第九，第十洞に對立する。

すなはち，佛像は，まづ顏がまるく，肩はゞがひろく，體格もゆたかである。いちおう初期の豐滿な肉體がたもたれてゐるといへる。しかし，その肉體はすっかり衣でおほはれ，露出した部分はまったくない。衣制はすっかりかはってゐる。兩肩をおほうた衣は，V字形のゑりをつくってさがり，胸のあひだから內衣の帶をながくたらしてゐる。兩手には袖狀に衣端がかゝり，翼のやうに左右にひろがり，もすそとともに，つよくそってゐる。寫實でなく，つよい精神的な表現である。階段狀の衣文は厚紙をならべたやうにおもく，この反りをいっさうつよめてゐる。立像でも，坐像でも，一般にしたほどひろく，衣が二等邊三角形にひろがって肉體をつゝんでしまひ，中國の傳統的な冕服の形式が，その威嚴をとりもどしたやうである。もちろん，この形式は，さきの右肩をあとからおほった式が，だんだんと變化し，ゑりをゑがき，袖をつくり，內衣の帶をたらすといふふうにしてできたものであらう。しかし，第五，第六洞では，これをはっきりと定型化し，冕服ふうな形に固定したところに意義がある。このやうな定型が成立すると，もう完全にこの形式が支配し，あらゆる像がみなこのやうに表現されるのである。

坐像では，結跏趺坐した足からたれさがる衣文がある。これが發展して，いはゆる「もかけ座」になるわけであるが，これの始原的なかたちが，いくとほりもあらはれる。ほゞ兩足のまんなかから大幅に衣端がたれ，左右につよくひろがる。さうしてさきがとがり，こゝでも二等邊三角形の底邊となる。着衣の寫實に關係なく，型の美である。これが菩薩の立像にあらはれると，ながい下裳と幅のひろい天衣になる。天衣は兩肩をつゝみ，またときには上膊におよび，V字形のゑりができ，まへで，ほそくなってX字形にまじはり，肉體はあらはされない。下裳はすそひろがりで，兩端がとがり，それはますます，つよくなる傾向にあって，こゝでも二等邊三角形の原理はまもられてゐる。

飛天になるとすこしかはるが，上衣をつけ，下裳をつけ，すっかり全身をつゝむことは，おなじである。そのうへ下裳のはしは足さきまでつゝみ，大きな房になってはねかへし，頭上の天衣は，あたかもこれに應ずるごとく，大きくひるがへってゐる。たゞし，逆髮形の飛天は，やはり依然としてみじかい腰衣だけで，やゝ事情がちがふ。

それから，佛の頭部には波狀の頭髮があらはれる。曇曜五窟，その他初期の石窟にはみないことである。たゞ第十六洞本尊，第十九B洞本尊と第七洞北壁下層の佛が異例であるが，前二者は，む

しろ，なんらかの意味で第五，第六洞式の影響とみられる。さうして，この波狀頭髮は第十一洞外のXIo龕やXIp龕（本書，第十卷，Pl. 95, 96）にあらはれ，龍門樣式につながるものである。菩薩の寶冠も，なほ三面寶冠の形式をおそひながら，三面にみられるものは圓形でなく，三角形である。唐草のかざりのほかに，蓮華の配されるのが，また特色である。とともに菩薩，天人の頸かざりとか，耳かざりとか，乃至は腕輪もほとんどなくなり，まゝ胸の薄板狀の頸かざりをのぞかせるのみである。この變化は，交脚菩薩像をみると，とくにいちじるしい。衣が全身をつゝむやうになれば，身體裝飾が減少するのは當然の現象であらう。しかし，いづれにしても，これらの尊像の服裝が土著化したといふふうに解せられる。

このやうに服裝の形式が變化したとき，顏，身體の表現もかはってくるのは當然であらう。つまり顏がほそくなり，肩はゞが減少してくる。一般にいって東西壁よりも，南壁の諸像の方がまるさをたもち，第五洞より第六洞の方がまるいやうにおもはれる。おなじまるい顏——たとへば第六洞方柱西面，東面本尊——でも，初期の諸尊にくらべると，顏が平面的になり，顎がおとろへて稜角的になり，眼や口もとが單調になる。耳はとくに貧弱になる。身體も，肩はゞはあっても，あつみが足りない。プロポォションはよくなったともいへるが，それはけっきょく，衣文が厭倒的につよくなり，曇曜五窟にみるやうな肉體の量感がなくなったことである。衣文の優美な形式が，しだいに一般を支配するやうな形勢にある。

飛天のからだつきになると，輕快な瘦身になり，大きくうごいて，かろやかであるが，さらに衣文のひるがへりが，そのうごきをかろやかにみせてゐる。曇曜五窟の，あの肥滿した重々しい飛天とちがってゐる。やゝまるみをもたせて表現した逆髮形の飛天も，手足のうごきが大きく，かるやかである。

3

さてかういふふうな服裝なり，表現の變化は，北魏の漢族化の傾向に一致するものであって，太和年間における宮中衣冠の制定とも，その風潮をおなじうしてゐる。そのことを念頭におき，しかもこの大規模な，計畫的な，しかも迅速な施行をみると，この第五，第六洞の造營は國家的な事業のうちでも，とくに朝野の力を集中してつくったものにちがひないとおもはれる。さうすると，非業の最後をとげた獻文帝（A.D. 466–470）の追福のため，孝文帝の初年（A.D. 476）につくられたとみることが，もっとも可能性のある推察である。したがって，太和七年（A.D. 483）における孝文帝の石窟寺行幸をもって，その完成とみることは，すこぶる自然な見方（本書，第十三・第十四卷，序章，p. 9）であるといはざるをえない。

圖　版　解　説

石　佛　古　寺

Pl. 1.　雲岡石窟 中央群および西方群

第三洞のまへから西方をみわたしたところ，第五洞から第七洞にいたる樓閣がみえ，現在の寺房がみえ，さらに曇曜五窟以下がはるかにならんでゐる。曇曜五窟のうへは玉皇閣 Yü-huang-koであり，第八洞のうへは丘上の鎖城である。むかって左手にみえるのが，戲臺であり，これを背にしてすすむと，山門，すなはち金剛門になる。

第五洞樓閣からうへにあがり，第四層から東にでる屋廊が，こゝではよくみえる。これをうへにでると，また岩壁にそうていくつかの石窟がある。こゝを第二段 (Fig. 18) とよばう。それは，この圖版の右上にもみえるとほりである。

Pl. 2.　雲岡石窟 中央群

第五洞から第十三洞にいたる中央群の全貌である。第五，第六洞あたりの岩壁が，もっともたかい。たかいためか，こゝは樓閣の屋上のあたりで二段になってゐる。第二段にすこしひろばがあり，こゝに第六洞上の小建築がある。その西手にある白壁の小屋は山上の僧房である。それから第七，第八洞と西へゆくほど岩壁はひくゝなり，したがって，第十一洞以西では，丘上に石づみをつくって，壁面をたかくしてゐる。これは山上の雨水をみちびくうへにも必要な施設である。第六洞樓閣第四層から第七洞樓閣に通ずる廊下もよくうかゞはれる。また，第六洞外壁の左右にたつ塔形も，こゝには上半がみえてゐる。第七，第八洞の左右が塔形であったかどうかは，まだはっきりしないが，中央は碑形のやうにおもはれる。第九，第十洞の東方は，あきらかに塔形であった。それはこゝからでもよくわかる。たゞ西方は改造されてなくなってゐるらしいのが遺憾である (本書，第六卷，p. 15)。列柱のまんなかには須彌山のうへの建築物があり，たぶん天宮をあらはしたものかとおもはれる (第六卷，p. 28，第七卷，p. 23)。とにかく，この前面に佛樓が，一齊にたちならんだことをおもふと，その壯觀のほどがしのばれる。いま草の茫々たる斜面は，とりはらった民家のあとで，手まへの貧弱な石づみの塀は，石窟群をかこふ境界線である。

Pl. 3.　石佛古寺 全景

これが石佛古寺の現狀 (本書，第一卷，Map 2) である。石じきの參道，金剛門，鐘樓，天王殿がみえ，各洞まへの佛樓がみえ，また，むかって右端には南面する僧房がみえる。

Pl. 4A.　石佛古寺 門前
B.　石佛古寺 金剛門

A.　石佛寺の門前を西からみた風景である。むかって左方に，金剛門以下の建物がみえ，右方に戲臺がある。白楊のむかふにみえるのは，第四，第三洞以東の東方群である。

B.　小さい山門で，石佛古寺の額がかゝってゐる。この門の左右には泥作の金剛力士像が安置されてゐる。むかって左手に，太鼓のなくなった鼓樓がみられる。

門內東西に二碑あり，乾隆十七年 (A.D. 1752) 重修雲岡大路の記を，二つにわけて刻してゐる。

Pl. 5.　石佛古寺 天王殿

金剛門をぬけると，ま正面に天王殿があり，そのなかに四天王の泥像をおく。まへに玄武岩の獅子があり，旗竿の臺石がある。天王殿の左右わきに小門があって，つぎの佛閣まへにみちびかれる。

天王殿南面の軒に光緒丁酉 (A.D. 1897) の扁額「威鎭乾坤」があり，北面の軒に雍正二年 (1724) の扁額「現身福國」がある。殿內の扁額は，正面が同治十二年 (1873) の「聲靈顯赫」，東面が乾隆四十六年 (1781) の「忠義不磨」，西面が同治四年 (1865) の「靈驗前因」である。

Pl. 6.　石佛古寺 俯瞰

屋根ばかりであるが，これで石佛古寺の全貌がみられる。まづ，最南端の戲臺はみえないが，參道がみえ，金剛門，天王殿，佛樓がみえ，さらに第二段のうへの佛殿があって，一直線になってゐる。それから，各建物には，それぞれ東西廂があり，鼓樓，鐘樓がみえる。天王殿の左右にある小屋は，どちらも厨房で，その西につゞく南面の一宇は，客殿である。反

對に，その東につゞく南面の一宇は僧房で，その前面の塼床がみえ，菜園がみえる。それから，その左手西面の二層殿は觀音殿である。いま寫眞の手まへにみえる，あたらしい屋根は，山上の僧房である。

Pl. 7 A. 石佛古寺 觀音殿

B. 石佛古寺 客殿

A. これは第五洞佛樓まへの東廂にあたる。めづらしく二層殿で，上層に觀音像をまつる。咸豊十一年 (A.D. 1862) の碑記にいふ觀音殿にあたる。

B. これは第五洞佛樓からいへば西廂にあたり，第六洞佛樓からいへば，東廂にあたる客殿である。したがって，もとはなかに炕 kang がしつらへてあった。

Pl. 8. 石佛寺 第五洞 四層樓

第五洞外壁をおほふ四層樓である。前庭には塼をしきつめ，左右に東西兩廂をつくってゐる。四層樓は斗拱のない，かはった建物で，第一層はとくにたかく，第二層はひくゝ，第三，第四層はやゝたかい。大棟には龍のかざりがあり，兩端には摩竭 makara の鴟吻がある。かはったのは，柱頭にみな，龍首をとりつけたことで，その作はいたってまづい。獸面と龍との瓦當も貧弱で，全體があたらしいものゝやうである。結構は明代の制をうけつぐにしても，細部はみな清代の作であらう。軒のはしに鐵の風鐸がかゝってゐる。

第四層石壁にそうて橋があり，第六洞の四層樓につらなり，また東方は屋廊になって上方への出口になる。これをでると，大棟のうしろにそうた空地があり，若干の小石窟 (Pl. 88, 89) がある。

佛閣前面の左方に蒙文の碑があり，右方に咸豊十一年 (A.D. 1861) の重修大佛寺碑記がある。後者は地方の搢紳が合力して觀音殿，東禪堂，樂樓の修理をしたことを，とくにのべてゐる。觀音殿はこの東廂である。東禪堂はその南の僧房にあたり，樂樓は戲臺のことであらう。この碑の題名中には，阿拉善和碩特親王が銀四兩をおくったことがみえるから，前者の蒙文碑は，この漢文碑に對應するものであらう。

第　五　洞

Pl. 9. 門口 正面

上述の四層樓をはいると，第五洞の門口になる。正面に，「如來聖像」(乾隆丙戌正月，A.D. 1766) の扁額がかゝり，右に順治八年 (1654) の重修雲岡大石佛閣碑記があり，左に康熙三十七年 (1698) の重修雲岡寺記がある。前者は佛閣の重修をのべ，後者は佛閣佛像の莊嚴繪飾のことをのべてゐる。石窟拱門は柱と扁額でみることをさまたげられるが，アーチになってゐることがわかる。拱門のうへはよくわからないが，拱梁があり，左右に獸頭がみえ，うへに合掌胡跪する天人がゐる。拱端のしたは，まったくわからないが，この圖版でみると，東端の獸頭のしたは，小さい後刻の楣拱龕があったらしい。こゝは外壁から一段とほりくぼめられてゐるので，その左右うちにむかった面がある。これには，やはり合掌胡跪の天人がかさねられてゐる。それは，やゝ纖細な天人であるが，上下にかさねられたところは，第十七洞脇大龕內の浮彫天人 (本書，第十二卷，Pl. 25, 26) によく似てゐる。(拱門高 5.30 m)

Pl. 10 A,B. 門口 東側 上部

A. こゝには拱端の獸頭がよくみえてゐる。獨角で，鼻のまるい龍形である。口をあけ，齒なみをそろへ，まへ脚を左右たかくあげてゐる。そのかっかうがやゝまのびして，精彩をかいてゐるのはおしい。拱端獸形のしたに後刻の楣拱龕が上半をみせてゐる。獸形のうへには，合掌胡跪の天人一體をみる。これは豊滿で，衣裳はからだに密着し，第八洞式の像である。このうへには，はるかに小さいが，同樣な合掌胡跪の天人がゐる。これからさきは破損するが，とにかく不規則な拱額である。(像高 0.71 m)

B. これは，前圖と直角になった西面の壁であるが，こゝにはさきにいったごとく，合掌胡跪の天人が，上下にかさねられてゐる。四段あったらしいがその最上の一體がみえる。やゝ纖細ではあるけれども，第八洞式である。この天人のうへに大きな蓮華文 (Rub. I H) がある。八瓣からなり，子房のまんなかから合掌の化生 aupapāduka が上身をあらはしてゐる。(像高 0.90 m)

Pl. 11 A. 門口 東側

B. 門口 西側

拱門の左右に，門神がゐる。こゝにみえるところは，たぶ

ん康熙三十七年(A.D. 1698)の泥作であらう。原作はPl. 12, 13にみられる。門神の左右は，ほそい角柱がたち，うへは蓮瓣帶で區ぎられる。このうへには樹下に結跏する二佛の坐像がある。膝のうへで手をくみ，左肩をあらはしてゐる。樹は挺々たる枝ぶりで，枝端ごとに樹葉がつくられ，天井にいたってゐる。天井はゆるく彎曲し，梢と梢のあひだに，飛天と蓮華がちらばってゐる。みなわりにあさい彫りであるうへに，けばけばしい極彩色があるので，當初のうつくしい輪廓はつかみえない。

この圖でみると，洞內の一部がみえ，洞內南壁にある門神もみえてゐる。その泥作はやはり康熙三十七年のものであらう。(側壁高 東3.00 m，西3.20 m)

Pl. 12. 門口 東側

Pl. 13. 門口 西側

左右の角柱と上下の蓮瓣文帶にはさまれた區劃に門神の像がある。破損は，さうたうにすゝんでゐるが，角柱には波狀の唐草文が彫ってあり，上欄には複瓣の蓮瓣文があり，下欄には刻線の蓮華文のあることがわかる。門神はうちがはの一脚をふんばり，そとがはの一手で，蓮瓣帶をおしあげてゐる。したがって他の一脚は膝をまげてうかせ，他の一手は肱をまげて腰にあて，顏面は自然にうちしたの方にむかってゐる。顏はふくよかでまるく，身體はふとってゐる。頭髮はたばねて，うへにあげ，そのうへに鳥翼の冠をつける。それは第八洞(本書，第五卷，Pl. 20)，第十洞(本書，第七卷，Pl. 26)にみるごとくである。身體には革甲をつけ，紐でしばってゐるらしい。袖は腕にはね，下裳は，脚にそうてひるがへってゐる。その點，第十洞門神にちかい。しかし，金剛杵 vajra もないし，矛ももってゐない。金剛力士 vajrapāni といへないから，たゞ門神 dvārapāla といふよりしかたがない。まるい頭光があり，大きくひるがへった天衣がある。あらはになった腕のやゝかたい表現，纖細な指の平面的なあつかひに，第十洞，第十三洞の門神(本書，第七卷，Pl. 26，第十卷，Pl. 3)を想起せしめるものがある。

こゝには，樹下禪定の佛(Rub. I A,B)が，相對して一對づゝみとめられる。樹幹をなかにして，顏だけは，やゝなゝめうちにむけてゐる。

いま，左右の角柱や門神龕の底に，たくさんの坐佛龕がみえるのは，みな後刻である。東側南柱上部と，西側北端上部とには，やゝとゝのった尖拱龕が一，二みられる。

Pl. 14 門口 東側 樹下禪定坐佛

挺々たる樹幹(Rub. I A)が，うねりながら，たちあがり，頂上にパルメット狀の樹葉がある。幹のとちゅうから，四本ばかりの枝がでゝ，傘狀に樹葉がしげってゐる。小枝の先端にかしはのやうな葉がつくが，それは一枚の葉ではなくて，針葉樹のかたまった葉を，あらはしてゐるやうにおもはれる。

樹幹の左右に兩手をくんだ禪定佛がある。うちがはの一體は一半破損して，いま泥で補修されてゐる。しかし，身體は堂々とし，顏もまるく，しっかりしてゐる。(樹高 2.00 m)

Pl. 15. 門口 東側 樹下禪定坐佛

これは四體のうち，東側南方の一體である。完好な素文の光背をつけてゐる。膝を一直線にはり，腕をまるくまるめてゐる。身體はゆたかであり，顏はひきしまってゐる。大きな額と大きな頰が決定的に雲岡像の印象をつよめてゐる。特別の作といふわけではないが，氣品があふれてゐる。(像高 0.90 m)

Pl. 16. 門口 天井

そとがはは剝落してゐるが，うちがはの半分は，よくのこってゐる。たゞ惜しいことは，天人の頭部が，故意にかきとられた形迹を有することである。二體づゝ相對して飛んでゐる。身體を弓なりにまげ，顏をおこしてゐるのは，本尊の方にむかってゐるわけであらう。合掌した手，はねた足に，いかにもたくまぬうつくしさがある。すっかりおほはれた身體も，いたって單純であるが，氣品があり，力にあふれてゐる。

四體の飛天のあひだに，まるい蓮華文がある。いま，五つ(Rub. I C-G)しかのこってゐないが，もとは六つか七つあったらしい。複瓣の，むっくりした蓮華で，まんなかに合掌の化生がのぞいてゐる。(最大蓮華徑 0.60 m)

Pl. 17. 門口 天井 蓮華文

これは西側の樹上にある三つの蓮華文(Rub. I E,F,G)である。大中小の三種あるが，蓮瓣，化生の形式はほゞおなじである。たゞ中形のものは，重形の化生が明瞭であり，蓮瓣の彫刻が，このうへなくするどい。全體として，わりあひ平面的にできてゐるのが注意される。(最大蓮華直徑 0.60 m)

Pl. 18. 明窓 東側

Pl. 19. 明窓 西側

そとの佛閣からいふと，明窓は，第三層に口をひらいてゐる。床に塼をしきつめてゐるので，最下の一部分は，かくれてゐる。ゆるいアーチ形の天井であるが，こゝは崩落してな

にものこってゐない。左右側は，どちらも千佛をもってうめてゐるが，西側の方が完備してゐる。つまり，十六體づゝ十二段の坐佛があり，中央十六體分のところに，二佛並坐の尖拱龕がある。尖拱龕のわきに，二體の脇侍がほってある。それで佛の總數は百六十六體，みな龕がなく，刻線の身光と頭光とをもってゐる。もちろん，蓮座のうへに，結跏趺坐する禪定の佛で，通肩である。胸まへの衣文は，なゝめ直線のものと，圓弧のものとの二種あり，交互にほどこされてゐる。たゞ上半では，いくらか粗略になってゐるのが注意される。この千佛區のうへに三角形の垂飾帶がある。したには博山爐を中心にした供養者帶がある。まんなかの二人は僧侶。右は女子，左は男子である。小さいが，身體つきはがっちりし，みな北族の服裝をしてゐる。さういふ點が，この壁面のこの石窟に對する特異點である。つまり，その他の諸像に對して，古式な傳統をたもってゐるわけである。

三角垂飾帶のうへには，坐佛をおさめた尖拱龕が，四つならんでゐる。擧手形に冠帶式の衣文である。最上に蓮瓣文の一帶がある。たてに五つ，長方形の孔がならんでゐるのは，明障子をはめたからであらう。

東側は，最下層が追刻の佛龕で混雜してゐる。上層も，三角垂飾がなく，二段になった佛龕がならんでゐる。（窓高 6.00 m）

Pl. 20. 明窓 東側 二佛並坐龕

擧手形の二佛並坐である。西側にくらべると，やゝ粗略である。面のとゝのへかたもあらく，衣文もない。それに，拱端の獸形もなく，脇侍もない。まはりの千佛像をくらべてみても，この方がはるかに簡略であって，衣文の彫刻がないものも多い。

Pl. 21. 明窓 東側 上部諸龕

上部の北端であるが，こゝには交脚菩薩の楣拱龕と，二佛並坐の尖拱龕とが，一組として上下にかさなってゐる。西方式の衣で，粗雜な作である。なほ北端の空所に，したは合掌胡跪の供養者を彫り，うへは樹下の佛立像をつくる。めづらしいことに，佛のまへに香爐をもった供養者，足もとに頭を地につけた供養者を彫ってゐる。その圖からすれば，定光佛 Dīpaṃkara Buddha と布髮供養の儒童 māṇava をあらはすものとおもへるが，樹木のあるのは異例である。基壇に，粗末ながら供養者たちの像を彫ってゐる。

Pl. 22. 明窓 西側 二佛並坐龕

東側の諸像にくらべると，はるかにこの方が精作である。たゞ惜しいことは，左方の佛が頭部をかく點である。のこってゐる顏はするどく，衣文も鮮明である。龕形，獸頭もあざやかであるし，かるく立った左右の供養者も，一種のおもむきがある。まはりの千佛はまるく，身體もがっちりして，古風なところをとゞめてゐる。（龕高 0.81 m）

Pl. 23. 南壁

南壁はほゞ直立してゐる。たゞ雲岡石窟の一般にみるやうに，中央がふくれてゐる。それは，この寫眞からも，よくうかゞはれるであらう。うへの明窓としたの門口とのあひだには，二段に佛龕がならんでゐる。一段八龕，總計十六佛である。南響堂山の第二洞では『法華經』（大正大藏經，第九卷，p.25）化城喩品第七の十六佛があったが，[1] こゝでは，そのことはあきらかでない。むしろ第七洞，第八洞，第十洞，第十三洞，第十六洞とおなじやうに，こゝを一區劃として，それにふさはしいやうに考案された意匠なのであらう。門口の左右に，たかい彫りの門神があり，また，ひくい彫りの供養者がある。それから明窓の左右に，象のになった五層の塔が浮彫にされてゐる。天井に接しては，三角垂飾と弧狀の帷幕があるが，明窓のうへはひどく破損してゐる。

これ以外の部分は不規則に諸佛龕が彫りこまれてゐる。當初の設計になかったにはちがひないが，一概に後刻とはいへないやうな佛龕から，たしかに後刻の小佛龕まで，たくさんにある。明窓左右の佛龕，また，門口左右の佛龕などは前者であらう。（壁高 15.50 m）

1 水野，長廣『響堂山石窟』，京都1937年刊，p. 21.

Pl. 24. 南壁 上部 東半

この明窓わきの，せまい區域は上下に四段の佛龕（1－4）がある。これにならんで，浮彫の佛塔（5）がある。佛塔の象は山嶽の浮彫のうへにたってゐる。佛塔のうへの空白には神像があり，よこの空所には，小さい佛龕（6－9）がある。神像はあさい浮彫で，胡坐してゐる。なに神かわからないが，逆髮形で，手に長杖をもってゐる。

最上帷幕のしたは坐佛尖拱龕（1）である。龕下の蓮瓣帶は東壁にまはってゐる。坐佛は擧手形で，龕內に天人形の脇侍，龕外に比丘形の脇侍がたってゐる。うへから第二層も蓮瓣帶は東壁につゞいてゐる。佛龕（2）は交脚菩薩の楣拱龕で，うへの佛龕と一組かも知れない。

Pl. 25 南壁 上層 西半

こゝも帷幕のしたは四段にわかれ，いちおう四佛龕(12—15)がある。そのわきに塔形(17)があり，塔形をはさんで東(16, 18—26)と西(27—32)に諸佛龕がある。塔形のうへの空所は，あさい浮彫の供養者たちが彫ってある。供養者たちは跪坐合掌するが，東にむかふもの，西にむかふものがあり，後者は西壁の佛龕に屬してゐるのである。そのうち，塔直上の一體は，逆髮形の供養神像である。また塔わきにも，塔にむかって跪坐合掌してゐる逆髮形の神像がある。

最上の龕(12)は坐佛の尖拱龕，第二は交脚菩薩の楣拱龕(13)である。それぞれ，したに蓮瓣帶があり，西壁につゞいてゐる。いま，この二龕の形式が，一々東部のものに合致してゐるのをみると，このあたりは，左右相稱を意圖したものであることがわかる。

塔形のしたには，五成の寶座にのった三佛龕(51)がある。これは，とくに纖細なつくりで，下部の追刻小龕にちかい。めづらしい形式で，三龕はみな坐佛像の尖拱龕，うへに共通の天蓋かざりがある。尖拱はするどくとがり，かけもは大きい。しかも，寶壇をみると供養者の群像はあるが，ふつうにみる列像式ではない。東龕のしたには，牀座にかけた像が三體ある。そのうち，右はしの合掌交脚の像は不明であるが，左の相對した二體は維摩居士 Vimalakīrti と文殊菩薩 Mañjuśrī との對問らしい。しかも，その中間にあるのは坐佛で，その配置は，まさに第六洞南壁中央の佛龕內(本書，第三卷，Pl. 31)のごとくである。銘區の左右は僧形で，そのあひだの一體は女子の像らしい。中龕のしたは銘區の左右に僧形があり，つぎは男女の一對らしい。その左右兩端のうち，右は麈尾をもって坐すから維摩であらう。左の足をくづした像は文殊像らしい。西龕のしたは大破してなく，こゝから第五A洞の南壁がみえる。

Pl. 26. 南壁 下部 東半

こゝでは，まづ門神と供養者とが最初の造營であり，そのつぎは四つの大龕(56-59)である。なほ，門神とのあひだにある二つの小龕(64, 65)は，これもほゞおなじころの作であらう。ところが，上部東端の六龕(49-54)，供養像わきの一龕(62)は，こゝの最大佛龕(56)の榜柱にある小龕(60, 61)とおなじ形式である。第二次の增刻であることはあきらかである。

たゞ殘念なことには，こゝの風化がはなはだしく，最下の諸像は，みな近世の泥像である。門口わきの供養者立像は，やゝよく保存され，大破しながらも，なゝめうちにむかった顏面だけはよくのこってゐる。足もとは，もとのものだが，合掌の手は泥作である。

Pl. 27. 南壁 下部 西半

こゝでも門神と供養者像が最初につくられたであらう。ついで，二佛並坐の三大龕(68—70)と，そのうへの二大龕(66, 67)がひらかれた。三大龕は東部とほゞ照應してゐるし，二大龕は交脚と坐佛で一對である。東部の大龕と樣式的に一致してゐる。その他の小龕は，また，もう一次あとの增刻である。東半とともに，さうたうにいたんで，最下層はみな泥作の像である。

Pl. 28. 南壁 中央部

明窓と門口のあひだは整然と二段になり，一段に八龕づつ十六の佛龕(33-48)がならんでゐる。各段には通じて蓮瓣帶を彫り，あたかも，各龕が蓮座のうへにあるかのごとくである。最上にとほしで，弧狀にしぼった帷幕(Rub. II c)をつくってゐる。上段はみな尖拱龕，下段はみな楣拱龕。尖拱額には五佛，もしくは七佛をおさめるが，楣拱額には各區に蓮華文(Rub. II A)を彫ってゐる。しかし，佛はみんなおなじ舉手形である。(下龕高 1.60 m)

Pl. 29-31. 南壁 中央部 諸佛龕

佛像はみな結跏趺坐，舉手形である。左の手は，まへにだし衣端をとるが，掌をたれてゐる。あるひは四指ををり，あるひは第二指をのばし，あるひは第二指と第五指をのばして，小異がある。通肩で，階段狀の衣文はあらく，簡素である。多くは，みな內衣の帶をしめさない式であるが，上段の一體と下段の五體は，帶のはしがさがってゐる。顏は，小ぢんまりとして，よくとゝのってゐる。

楣拱額の各區(Rub. II A)には，まうへからの蓮華と，なゝめにみた蓮華とが，交互におかれてゐる。尖拱額の拱端は，不安定で渦卷だけのもの，なにもないものなどがある。みな，いゝかげんに朱と白と綠をぬってゐるから，もとのすがたはうかゞひがたい。(上龕高 1.77 m)

Pl. 32, 33. 南壁 上部 東西塔

Pl. 34 A, B. 南壁 上部 東西塔 側面

左右一對の塔形は，やゝたかく彫られ，ほゞおなじ形である。たゞ東塔は，象のしたに山嶽の重疊たるさまをみるが，西塔にはこれをみない。塔をになふ象は，ま正面むきで，前脚と長鼻とで鼎立してゐること，第六洞の塔(本書，第三卷，

Pl.189, 190) におなじである。ほそい頭絡があり，大きな耳がついてゐる。まづ，五成の寶座があり，そのうへに五層の塔身がある。みなやねは瓦葺で軒にたるきがある。各層みな坐佛の二三龕をならべるが，西塔第一層中龕だけは，二佛並坐像である。最上のやねに，また五成の寶座があり，相輪をうけてゐる。刹柱のいたゞきには寶珠形がある。側面には，各層それぞれ坐佛の一龕を彫る。東塔には，頂上にあさい彫りで逆髮形の神像があるが，西塔には頂上と西わきに，逆髮形の神像があり，合掌長跪して，いかにも敬虔なすがたである。いまこのあたりにある彩繪は，まったく近世の附加物である。

塔のわき，明窓にそうて，それぞれ二つづゝの坐佛龕がある。ことに東部の二龕(3, 4)は大きく堂々としてゐて，おそらくはじめの計畫によるものであらう。たゞわからないことは，こゝにも以前に千佛などの像があり，それをうちこはしてこの佛龕をつくったことである。その千佛のなごりは，この寫眞よりも拓本(Rub.II c)の方に，よくうかゞはれる。西部の二龕(14, 15)は，ほゞおなじ形式であるが，やゝ小さく，纖細になり，嚴密に照應してゐないのはふしぎである。東の上龕(3)は仰蓮華の座があり，西の上龕(14)は俯蓮華の座がある。どの佛龕も，みな龕內に脇侍をもち，尖拱額に過去佛をもつが，東部下龕(4)だけは坐佛をなかにした供養者群である。拱端は西部下龕(15)をのぞけば，みな渦卷形である。なほ，これら佛龕と塔形とのあひだにも，小さい佛龕があり，東部の四龕(6－9)は，みな單純な坐佛の尖拱龕である。西部の諸龕は，やゝ複雜で，そのうちにひとつの二佛並坐龕(21)がある。これは拱端に唐草かざりがあり，寶壇に供養者列像があり，さうして，さらにそのしたに安坐した三人の菩薩形(22)がある。手は蓮華の蕾でももってゐるらしいが，その姿勢からみると，太和七年龕(A.D.483)の觀音，勢至，文殊菩薩(本書，第八卷，Pl.30)が想起される。このしたの二龕(23, 24)も，刹柱西の一龕(27)も，供養列像の寶壇をもってゐる。その佛龕(27)のしたに，一體だけ佛の立像(28)があるのはめづらしい。それは頭上に天蓋をいたゞいてゐる。これらの小佛龕は，だいたいおなじやうな形式で，東部の四小龕(6－9)とおなじく，中央四大龕(3, 4, 14, 15)についでつくられたものとおもふ。(東塔高4.53m，西塔高3.99m)

Pl. 35. 南壁 中層東端 諸佛龕

こゝの七つの佛龕(10, 49－54)は，いづれも纖細きゃしゃな形式で一致してゐる。うへの諸龕，中央の諸龕(33－48)よりも，はるかにおくれた第二次の追刻であらう。佛龕(10)は坐佛の尖拱龕で，小さいながらに天蓋をそなへてゐる。佛龕(50)も天蓋があり，坐佛の楣拱龕，これには佛にかけものがあり，左右の脇侍が，やゝくづれた半跏であるのがめづらしい。佛龕(49)は，二佛並坐の尖拱龕で，寶壇に纖麗な供養者がある。佛龕(51－54)は一組である。うへの楣拱龕に對して，したの尖拱龕があり，東の交脚菩薩に對して西の坐佛，東の坐佛に對し西の二佛並坐があり，みなかけもの發達した像である。した二龕の尖拱額のあひだには，維摩居士 Vimalakīrti と文殊菩薩 Mañjuśrī との對問像がみられる。佛龕(11)は，未完成である。佛龕(10)とともに，まへにあった象下の山嶽形を，うちこはしてつくってゐる。

Pl. 36. 南壁 東部下層 佛龕 (52)

南壁において，もっとも完備した佛龕である。本尊は簡素な坐佛であるが，尖拱額には七佛がならび，拱端には獸形があり，左右にたった比丘形の脇侍はいちじるしい。脇侍の圓光のうへに合掌の供養天人がならんでゐる。やゝ粗略ともいへるが，作ゆきが圓熟してゐて，南壁製作の時代を知るうへに，代表的な作品である。

左右の柱頭にあたり，小さい坐佛の尖拱龕(60, 61)を彫ってゐるが，これは供養者わきの楣拱龕(62)とともに纖細な作で，第二次の追刻であらう。(龕高 2.35 m)

Pl. 37. 南壁 西部下層 供養者立像

この供養者像は，東がはの像とちがって，よくのこってゐる。すらりとした體軀で，右手に香爐をさゝげてゐる。足下には，半圓形の蓮座がある。下裳，天衣はうすく全身をおほひ，衣端は左右にはねかへってゐる。手足はやゝ大きく，面貌はほっそりとしてゐる。三角形をならべた寶冠には蓮華のかざりがある。かういふところに香爐をさゝげた供養者をおくのは，第十三洞明窓(本書，第十卷，Pl. 5)と同趣である。たゞ，これは第五，第六洞式の像，あれは第七，第八洞式の像であることがちがふ。

わきの小龕は，いちおうみな纖細な形式で，第二次の追刻である。たゞ，ほかの部分とちがひ，そのうち若干身體つきのゆたかなものがある。たとへば，供養者左わきの坐佛楣拱龕(74)，足下の坐佛尖拱龕(78, 79)のごときはそれで，これらは，いくらか，はやくつくられたかとおもふ。(像高 1.81 m)

Pl. 38A,B. 南壁 門口 門神

これは，すっかり，近世の泥粧をとりのぞいたところであ

る。かなり風化して，ほとんど細部はみられないが，高髻形の尊像であることはたしかである。身體には下裳と天衣をつけ，ほゞ正面にむかふが，頭はなゝめうちにむかふ。うちがはの足をあげ，そとがはの足をふんばり，うちがはの手は衣端をとって腰に，そとがはの手は，蓮華の蕾のやうなものをもって胸においてゐる。なに神ともいへないすがた，面貌など，むしろやさしく，天人かとおもはれる。かたちのうへでは，神像といふより，門に侍立する供養者とすべきかも知れない。

まはりに，無數の小佛龕があるが，みなひどく風化してゐる。(像高 3.00 m)

Pl. 39. 東壁

東壁は，ぜんたいに風化がはなはだしい。それは，うしろが山につゞき，西壁のごとく山から隔離されてゐないからであらう。南壁とのさかひは，垂直で明白であるが，北壁とのさかひは不明瞭で，北壁といっしょになって，半ドゥム狀になる。たゞ便宜上光背の線で北壁と東壁とをわけて説明しよう。東壁は整然と六層にわかれ，各層に蓮瓣文帶がある。最上層は，坐佛の列像があり，天蓋かざりになる。中心に大きな立像の脇侍佛があるが，これは康熙の泥作である。たゞ像のしんはのこってゐるから，たかさなどは信頼できる。胸にあげた手も，やゝもとの形を想像させるが，光背はすっかりきえてゐる。

第一層は二佛並坐龕が二つ(22, 23)，第二層は二佛並坐龕がひとつ(20)あり，第三層は交脚菩薩の楣拱龕(18)である。これだけは脇佛の南がはにあり，北がはには，第二層の交脚菩薩龕(21)，第三層の二佛並坐龕(19)がみとめられる。

第四層は，まづ大きく二佛並坐の龕(11)があり，その南に二つの坐佛尖拱龕 (12, 13)，北に坐佛尖拱龕 (14)，交脚楣拱龕(15)，坐佛尖拱龕(16)がある。南の上龕 (12) には仰蓮の座(Rub. II E)が彫ってある。北の三龕は，どうしたわけか不規則で，第四の二佛尖拱龕 (17) は第五層にくひいってゐる。この二佛並坐大龕(11)は，いちばんよくとゝのひ，二佛の佛頭はやゝほそてであるが，うつくしい。これにも，中古玉眼をはめたらしく，目にうつろの穴があいてゐる。尖拱額には七佛の坐佛があり，拱端に獸形があり，足下には籐几のやうな柱頭がある。柱は胴ぼそで，いたゞきに渦文のあるのが(Rub. II F)めづらしい。

第五層は二佛並坐の龕 (9) と坐佛の龕(8)，それにやゝ小さい坐佛の龕が三つ (8－10) ある。みな尖拱龕である。第六層は交脚菩薩楣拱龕三(1, 3, 5)と坐佛尖拱龕二(2, 4)とを交互にならべてゐる。たゞ最北の交脚菩薩龕(5)のみは，楣拱がたしかめがたいのみならず，どうも尖拱龕であるらしくみえる。ぜんたいとして，わりによくまとまり，みじかい時期の一貫した製作がかんがへられる。(壁高 16.06 m)

Pl. 40. 東壁 南部下層

こゝには南部下層，第一層と第二層とがしめされてゐる。三龕 (19, 21, 22) とも二佛並坐の尖拱龕であるが，みられるとほりの慘狀で，像は泥作，まへの塼づみも近作である。

Pl. 41. 西壁

東壁に照應する西壁であるが，保存は雲泥の相違である。それは背後が第六洞で，うしろの丘からくる地下水が遮斷され，乾燥狀態がたもたれたからであらう。上下に，たゞ一本の大龜裂があって，これは東壁の大龜裂につゞいてゐる。この大龜裂のすそは，一部破損があって，第六洞に通じてゐる。いま泥と塼で封じてゐるらしいが，この壁(Fig. 11)は，いたってうすいのである。

東壁とおなじく脇侍佛の大像がある。たかさ約 7.54 m。また光背のしたに脇侍菩薩の立像がある。全面は六層にわかれ，整然と佛龕をならべてゐる。各層ごとに，蓮瓣帶があり，最上層に坐佛列像と帷幕とがある。第一層のみは，近時の泥像でおぎなはれてゐるが，その他は保存がよい。衣文はみな通肩といへるが，弧狀にならず，左右のゐりすぢがとほってゐる (Pl. 43)。佛龕佛像の樣式は，いたって單純であって，一擧にしあげられたことがわかる。通じて，やゝ纖細のつくりであることからすると，南壁よりは，のちにつくられたことが察せられる。たゞ楣拱龕に二佛並坐 (3, 5) があったり，坐佛(13)があったり，尖拱龕に交脚菩薩(9)があったりすることが，まったくよそにみない異例である。

また，東壁とちがふところは，脇佛立像のうへからおくにまはって，千佛の小龕をならべてゐることである。龕高は約 0.55 m。たゞ第一層だけは尖拱大龕 (19) があったらしい。左上部の供養者列像がのこってゐる。いま，こゝにも泥壁をぬり，繪をかいてゐる。その繪を信用すると，この尖拱大龕(19) は坐佛があったことになり，そのよこに，上下二つの尖拱龕(20, 21)があったことになり，その上龕(20)は二佛並坐，その下龕(21)は坐佛の一尊であったことになる。たぶんさうであったらうとおもはれる。いま千佛龕の一部は破損してゐるが，光背の左下部にまでひろがってゐたらしい。それから，一度できあがってゐた光背の一部を彫って，また纖

細な様式の小佛龕(22-30)が追刻されてゐる。これは,あきらかに南壁などにみる第二次の追刻龕である。(壁高15.06 m)

Pl. 42. 西壁右脇侍佛頭部

こゝにみる佛頭は,すっかり康熙の泥作である。しかし光背(Rub.IIG)はもとのものである。それはかなり繊細なものであって,この壁面でも,最後にできたものかとおもはれる。もちろん擧身光であるが,いま,追刻佛龕のため上部しかのこってゐない。そとは火焔,うちの圓光も火焔,しかし,そとは,山嶽狀の火圏から,三つ光焔がたちあがってゐるかたち,うちはゆれてたちあがる焔光を,ねもとでつないだ形式である。さらにそのうちは禪定の坐佛帶である。全部で十三體ある。中心は蓮華文。身光外緣の火焔帶のつぎは飛天帶であったらしい。いま,その天衣の一部がのこってゐる。肩の三角形の部分には,また肩光があったらしい。

光背の部分に彫りこんだ小佛龕(20-23)は,みな繊細で第二次の作である。左がはの二龕(20,21)は,尖拱龕と楣拱龕で一對とおもはれるが,龕內は,どちらも坐佛であるのが異例である。右がはの上龕(22)は楣拱形で,坐佛をおさめ,下龕(23)は楣拱額だけつくり,あとは土でぬりこめてある。

右脇佛の,光背そとまはりにある千佛龕は,やゝふっくりしてゐる。みな通肩であるが,弧狀の衣文はなく,兩ゑりのさがった式であるのは,うへの坐佛列像とおなじであって,この洞,この時期の特色であるといへよう。(光背幅5.36 m)

Pl. 43. 西壁上部

こゝには,うへ三層をしめす。これでみると,西壁のかたむきぐあひがよくわかる。近世の彩色がけばけばしいが,佛像はよくとゝのってをり,よくのこってゐる。膝の衣文が多く省略されてゐるのは,したからあほぎみられるからであらう。衣は階段狀のひだからなり,兩肩からたれた衣は,三角形のゑりすじをつくってゐる。そのゑりのあひだから,みな內衣の帶のはしがたれさがってゐる。光背はたゞゑがかれたもののみで,本來のものはない。しかし,もともと光背はゑがゝれてゐたのかも知れない。(最上層高 1.70 m)

Pl. 44. 西壁上部

第六層は,尖拱龕と楣拱龕が交互にあり,めづらしいことには楣拱龕(3,5)に並坐の二佛をおさめてゐる。第五層の交脚菩薩をおさめた尖拱龕(9)も異例である。拱額の裝飾はみなわりにおほまかである。全體の調子がよくとゝのってゐて,一擧にしあげられたことが想像される。(最上層高1.70 m)

Pl. 45. 西壁第四層佛龕(13)

坐佛の楣拱龕である。龕內に三尊があり,左右の間に,脇侍よりも大きい供養者の立像がある。右わきの供養者は,南壁門口のそれのごとく,香爐を手にしてゐる。やゝほそての像で,龕はあさい。弧狀の幕はまるく,飛天をおさめた框は丈がたかい。坐佛の頭はやゝほそく小さい。階段狀のひだをもった衣文は,兩肩からさがり,腕から袖のやうにたれてゐる。膝にも,大きなひだがあり,膝のまはりにしいた衣端は大きい。しかし,まだ「かけも」にはなってゐない。

右端にある火焔の彫法をみられたい。近時の彩色のあひだに,もとの生き生きした鑿あとが,うかゞはれる。(龕高2.20 m)

Pl. 46. 西壁第四層佛龕(12)

この二佛並坐の龕は,まんなかに,大きな亀裂がとほってゐる。衣文はおほまかで,膝の衣文は省略してゐる。拱額には,禪定坐佛を中心に,左右から供養者がひざまづいてゐる。拱端の獸形は頸をまげ,前脚をあげて,第六洞南壁の獸形(本書,第三卷,Pl. 24, 28)をおもはす。そのしたの柱頭は,布をかぶせて,ひきしばったやうなかたちである。(龕高2.20 m)

Pl. 47. 西壁第四層佛龕(10, 11)

完好な坐佛の尖拱龕(10)と交脚菩薩の楣拱龕(11)とがならんでゐる。おくの二龕(12, 13)よりは,はるかにすぐれてゐるやうである。交脚菩薩の足下には,合掌跪坐の二僧がゐる。一方は頬がこけ,老人の相,他方はまるまるとして壯年の相,老壯相對せしめたのが注意される。この本尊菩薩は,顏も手足も,肉つきがとくにゆたかである。頭上の三角形を三面にならべた寶冠も,堂々としてゐる。左右の間の脇侍像は大きさもちがひ,手足のとりあつかひが,ぎこちない。弧狀の幕や飛天も,おくの楣拱龕(13)にくらべると,はるかにのびのびしてゐる。

坐佛龕(10)の方は,やゝほっそりして,別人の作であることが,あきらかである。拱端の獸形,そのしたの大斗をさゝへる逆髮形の供養者など,やゝよわい。拱額には,禪定坐佛を中心とした跪坐の供養者たちがゐる。(龕高 2.20 m)

Pl. 48. 西壁 第三層 交脚菩薩龕(14)

この寫眞には,かなり埃のたまってゐるのがみられるが,調査前はみなかうであった。この交脚菩薩の顔は,なかなかしっかりしてゐる。頭上には三角形をならべた寶冠をいただき,足下には獅子を配してゐる。左右廂には,二人づゝの合掌比丘がたってゐるが,みな圓光でなく,寶珠光であるのが注意される。楣拱内の飛天は,よこながくとび,帷幕の弧形はつよくない。(龕高 2.60 m)

Pl. 49. 西壁 第二層 二佛並坐龕(15)

したの方の一部分が,風化してゐるのみで,その他はわりに保存がよい。二佛並坐の右手は,おなじく擧手形,左手はおなじくまへにたれてゐるが,一方は掌をみせ,一方は甲をみせてゐる。尖拱額の九佛,拱端の獸形もすぐれてゐる。龕外左右の脇侍から,拱額をめぐってならぶ跪坐供養者は,いたってにぎやかである。

この圖版には,右脇佛の右わきにある,小さい追刻の佛龕(25-26)がみえる。それらは,みな坐佛をおさめた尖拱龕である。(龕高 3.00 m)

Pl. 50. 北壁 本尊佛坐像

總高約 15.00 m,巍然として北壁のまへにすわってゐる。まへで手をあはせた禪定の像,右の足さきが,つよく左の股をおしてゐるのがわかる。全體に泥の補修があり,金紙をはってゐる。康熙の補修であることはあきらかである。しかし,だいたいの顔だち,耳の大きさ,身體つきに,もとのおもかげはうかゞはれる。手足の指なども,だいたい,もとのものである。螺髮はもちろんあとのものであり,衣文も原形をとゞめてゐない。たゞ窟全體を壓するやうな巍然たるすがたは,たしかに北魏の舊をしのぶに足りる。

大きな擧身光が,北壁全體をおほひ,天井のなかばにいたってゐる。したがって,北壁は光背のカァヴにしたがひ,左右壁へ斷絶なく移行してゐる。光背の最下に脇侍菩薩像がたち,そのうちがはに背後の隧道にはいる口がひらいてゐる。(像高 15.02 m)

Pl. 51. 北壁 本尊佛坐像 上身

ひらたい額,ひろい頰,ながい眉に脣のあたり,かなり北魏の舊を,しのばしめるものがあるけれども,全體に泥の薄層があって,原形ではない。螺髮はことにひどい。耳も大きさはたもたれてゐるが,細部はちがふ。いまみるごとく通肩であったかどうか。 第五洞内の諸像からは,さやうにかんがへられるが,さうすれば,ゑりは兩方からないめにさがってゐたことであらう。たぶん,まはりの諸像にみるやうに,階段狀の衣文であったとおもふが,そのおもかげはまったくない。

擧身光背の外緣は,大きな火焰である。頭光の外緣も,火焰である。どちらも,ねもとを弧狀に連結したものであるが,前者は焰のしたに大きな瘤節をつくり,後者は焰のあひだに,またべつの遊離した焰をいれてゐる。その構成は,第十三洞南壁七佛のどの光背(本書,第十卷,Rub.II)にも似ず,かへって第二十洞大佛の光背(第十四卷,Pl.20)に似てゐる。頭光火焰帶のつぎは供養の飛天帶である。つぎは坐佛帶,まんなかは蓮華文である。かなりひどくいたんでゐる。擧身光内區も飛天帶があり,肩の三角區には,またもえあがる火焰形がある。

Pl. 52. 北壁 本尊佛坐像 下半

禪定の手はまへでかさね,すくふやうな手つきなので,した腹のところに大きなくぼみができてゐる。拇指と第二指とのあひだに,三角形のすきまがあいてゐる。このあたりは,石がよくのこってゐるので,ほそい指もある程度まで信頼できる。右足の指が左の股にのってゐるが,このあたりもよくのこってゐるから,紙と泥の薄層とのしたには,もとの石がよこたはってゐるだらうと想像される。たゞし,膝したの仰蓮華は,まったくあとの泥作であり,床の敷石,敷塼もあたらしいものである。正面の塼築壇も,みな近世の施設である。

圖版むかって右手にみえるのは,背後の隧道に對する入口である。

Pl. 53. 北壁 本尊佛坐像 頭部

本尊の頭部正面である。風化した本尊に泥の薄層をつくり,金紙をはって修理してゐるのである。螺髮は全然あたらしいもの。光背も一般に風化し,尖頂の火焰は,ほとんど繪ばかりである。

Pl. 54. 北壁 本尊佛坐像 光背一部

これは擧身光の内區にある飛天帶の一部である。合掌して空中をとんでゐるが,足のやうすは,よくわからない。第五,第六洞にみるやうな上衣下裳の飛天で,足をつゝんでひるがへる下裳のはしはとがってゐる。天衣もたかくあがり,さきがとがってゐる。顔は,やゝながく,ひきしまった表情で,ないめに本尊の方にむかってゐる。

Pl. 55A. 北壁右脇侍菩薩と隧道西口

B. 北壁左脇侍菩薩と隧道東口

北壁の，いちばんおくまったところ，本尊の肱したのところに口があって，背後の隧道でつらなってゐる。すっかり風化して，意匠はまったくわからなくなってゐる。そのそとわき，すなはち光背のしたに脇侍菩薩がたつ。これもすっかりいたんで，いまあるのは近時の泥像である。右の方は康熙三十七年（A.D. 1698）の作かとみられるが，寶冠（Rub. II D）と光背とはほゞ原形をとゞめてゐる。左の頭部は，たいへん，できがわるく，右脇侍よりも，もっとあたらしいものであらう。（像高 7.90 m）

Pl. 56. 北壁右脇侍菩薩頭部

この頭部は，もとより泥作であるが，寶冠と光背はよくのこってゐる。寶冠の正面と側面には，三角形のかざりがあり，その中間に蓮華文がある。三角形にも蓮華の彫刻があり，蓮華文には莖がついてゐる。

光背は寶珠形の頭光である。まはりはC字形唐草文であり，中心は蓮華文，いたって簡單な意匠である。

右わきに小佛龕（27, 28）がみえ，左うへ，つまり本尊光背のなかに第二次追刻の小龕（29-31）がみえる。（光背高約 2.00 m）

Pl. 57. 天井

ほゞ梯形をなすが，光背はふかく底邊からくひこんで，中心におよんでゐる。風化は，一面にはなはだしく，全體の構成はわからない。たゞ，龍身の一部と飛天の二三が，西北隅にみられるだけである。（東西長約 10.20 m）

Pl. 58A. 隧道北壁西端

B. 隧道北壁東端

隧道の北壁は，その西壁，東壁に連續して，おなじ僧形の行列がみえる。あたかも本尊大佛に右繞の禮 pradakṣiṇa を修するがごとく，西から東へすゝんでゐる。頭部は，ほとんど摩滅してゐるが，ないめまへにむき，足も前方へうごかしてゐるかのごとくである。行列のうへには，ひだをとった垂幕があり，また三角垂飾がある。さうして，そのうへには欄間のやうな一帶があって，その一框ごとに，飛天一體をいれてゐる。それは第九，第十洞の隧道にみるやうな飛天（本書，第六卷，Pl. 86，第七卷，Pl. 75B）でなく，第五，第六洞ふうの上衣下裳の飛天である。天井は，すこしく彎曲し，全面に龍と飛天と蓮華の浮彫（Fig. 17）がある。（隧道高 4.00 m）

Pl. 59A. 隧道南壁

B. 隧道全景（東より）

A. 南がは，つまり本尊の背後である。このやうにひどく風化してゐるが，それはおそらく武人の行列（Pl. 60B）であったとおもはれる。角にはほそい方柱がたってゐる。

B. こゝには隧道損傷のやうすがみられる。ま正面は西壁であるが，こゝの行列僧も，ほとんどきえてゐる。天井のわづかながらにカァヴしてゐるのを注意されたい。（隧道高 4.00 m）

Pl. 60A. 隧道東口西壁

B. 隧道南壁東端

A. こゝは，ほそい角柱にはさまれた一區である。武神の像があったらしい。それはわづかにのこる石の面から，片足をあげ，片手をあげ，片手を腰につかねた武神像であることが察せられる。これからうへは，北壁同樣，三角垂飾と幕の垂飾があり，つぎに欄間やうのかざりがあったものと，おもはれる。

この壁の，つゞきにみえるのは大佛の膝であり，さらにむかふにみえるのは南壁の東部である。

B. こゝもひどく壞滅してゐる。しかし，片足をあげた列像であることはわかる。おそらく，武神の行列像であらう。これも右繞の方向にむかってゐる。（隧道高 4.00 m）

第五洞外窟龕

Pl. 61A. 第五A洞外壁

B. 第五A洞北壁

A. これは第五洞外壁の西方にある。佛樓をのぼってゆけば第二層である。その第二層の西壁が，ちゃうどその入口にあって，じゃまをしてゐるのである。

門口の兩わきには力士像がある。こはれてゐてよくわからないが，頭部だけはうかゞはれる。顴骨のはった，口の大きな，眼の角ばった顔で，第十二洞門口の力士像（本書，第九卷，Pl. 43），第三十五洞の外壁力士像（第十五卷，Pl. 62）に似てゐる。寶冠をつけ，寶冠のひもが，大きく光背のうへには

ねかへってゐる。

門口のうへは，尖拱額があり，がっちりした體格の七佛がすわってゐる。拱端は，こはれてゐるが，獸形がある。そのわきに第八洞門口のやうな多面多臂神(本書，第五卷，Pl. 17)があったらしい。右わきは金翅鳥 garuḍa にのってゐる。ヴィシュヌ Viṣṇu 神であらう。なほ拱額のまはりには，若干の供養者がめぐってゐる。(洞口高 1.60 m)

B. 北壁は佛龕をつくってゐない。直接に一光三尊の坐佛を彫ってゐる。三尊は，きゃしゃな身體つき，複雜な衣文の龍門式で，「かけも」が大きく發達してゐる。光背は，たかく天井のまんなかにいたり，その意匠は，たゞ外緣に火焰だけを彫った簡素なものである。本尊右わきに大きな破壞口があって，本洞內部に通じてゐる。(像高 1.45 m)

Pl. 62 A. 第五A洞 北壁 本尊 佛坐像

B. 第五A洞 北壁 左脇侍

A. 頭部はかなりいたんでゐるが，口もとは，しっかりしてうつくしい。階段狀のひだをもった衣は兩肩からさがり，ゑりのあひだからは，內衣の帶がたれさがってゐる。不幸，手足もかなりいたみ，修補の孔がいたましくのこってゐる。

B. ほとんど完存し，そのやさしい身體つきと簡素な衣文に，すぐれた手法をしめしてゐる。顏はやさしく，眉と目はかんたんな弧線であらはしてゐる。三角形と圓形をならべた寶冠，その中心には，半月形をおいてゐる。下裳は簡素であり，天衣は大きく兩肩をつゝみ，まへにたれて交叉し，交叉點に，大環をはめてゐる。右手は大きく胸に，左手は腰のあたりで天衣のはしをにぎってゐる。大きく足をひらいて蓮華座のうへにたち，やゝほそながい寶珠形の光背を，せおうてゐる。全身にみる朱色はもとの彩色とおもはれる。(像高 0.93 m)

Pl. 63 A. 第五A洞 北壁 本尊 佛坐像

B. 第五A洞 床 蓮華文

A. この本尊は，龍門式で，かけもが發達してゐる。左右は膝のしたから，まんなかは足のうへしたから，衣のはしがさがってゐる。平行したひだをつくりながら，つよく左右にひろがってゐる。左右のはしはとがり，すその線は，整然と波狀にをりかへってゐる。

B. 長方形の床に五つの蓮華文(Rub. III B)が彫ってある。線刻だけで四瓣，あるひは五瓣の複瓣蓮華で，實に整然と彫ってある。しかし，これからさらに立體的に彫ってゆくものか，それとも，これだけで完成したものかはわからない。たぶん完成してゐるのかとおもふ。第九，第十洞の前庭(本書，第七卷，Fig. 37)，龍門賓陽洞[1]，響堂山第五洞[2]にも床上に蓮華文の裝飾がある。(東西長 2.10 m)

[1] 水野，長廣『龍門石窟の研究』，東京 1940年刊，Fig. 13.

[2] 水野，長廣『響堂山石窟』，京都 1937年刊，Pl. XXIII.

Pl. 64 A,B. 第五A洞 北壁 供養比丘

どちらも脇侍菩薩の光背のうへにのりだしてゐる供養者である。一體づゝであるから，したの三尊にあはせて，五尊像とみることができる。一方は老年相，他方は壯年相にしてゐるから，のちの大カァシャパ Mahā-Kāśyapa (大迦葉) とアァナンダ Ānanda(阿難)を脇侍とした五尊像に一致する。いづれも簡明な刀法で，純朴な表情をたゝへてゐる。

Pl. 65. 第五A洞 南壁 上部 東半

Pl. 66. 第五A洞 南壁 上部 西半

天井に接したところに，三角形の垂飾をつくり，そのしたに，坐佛の列龕をつくる。禪定の佛であるが，胸までおほふた式と，兩肩からゑりをつくった式との二種類がある。それからしたは，アァチ形の拱門になるが，その左右上部に相むかひあった騎象の菩薩像と騎馬の太子像 (Rub. IV C) とがある。後者は，馬の四脚を飛天がさゝげてゐるので，出家踰城の太子であることがあきらかである。鞍，鐙，泥障をこまかくあらはし，北魏の假器泥像[1]にみるごとくである。うしろから繒蓋をさしかけてゐる人物があり，まへに合掌の群集がゐる。前者は象にのってゐるから普賢菩薩 Samantabhadra と解せられる[2]。うしろから繒蓋をさしかけることは騎馬像におなじである。合掌群に對し，こゝには樂天群がある。全體に朱色をおび，もとからの色彩をつたへるものとおもはれる。(龕高 0.30 m)

[1] 『支那古明器泥像圖鑑』，第二，第四輯，東京大塚工藝社 1932年刊，Pl. 14, 15, 37.

[2] 普賢菩薩の像は第十三A洞 (本書，第十卷，Pl. 112 A) にもあった。第九洞の騎象像(本書，第六卷，Pl. 44) も，けっきょくは普賢菩薩と解すべきやうにおもはれる。

Pl. 67 A. 第五A洞 南壁 下部 東半 アショカ因緣像

B. 第五A洞 南壁 下部 西半 儒童本生像

A. 大きな舉身光を背おひ，まるい座をふんまへた佛の立像である。脚を左右にひらき步行してゐるごとくである。おしいことに，頭部と擧手の右手を缺くが，全身をおほふ衣

文は堂々と，しかも，整然とつくられてゐる。左手に佛鉢をもつが，これによじのぼるがごとく，三人の童子が相かさなってゐる。その最上者がアショカAśoka(阿育)王の前身であらう。[1] わきに，合掌してたつ比丘像があり，まるい頭光をおふ。頭光うへにも比丘の合掌像がある。(像高0.67m)

B. 東半のアショカ因緣像に照應する佛の立像である。大きな光背をおひ，臺は省略して蓮瓣をみないが，蓮趺かとおもはれる。大きな足をひらいてあゆむがごとく，足下には，ひざまづく儒童 māṇava の頭髮をふんでゐる。おしいことに頭部をうしなふが，全身をおほふ僧衣の衣文は堂々とひろがってゐる。

わきにたつ合掌比丘像は前者におなじである。(像高0.62 m)

[1] 水野清一「雲岡石窟に於ける二三の因緣像」(羽田博士頌壽記念東洋史論叢)，京都1950年刊，p. 867－869.

Pl. 68. 第五A洞 東壁 楣拱龕

ひじゃうによくとゝのった交脚菩薩楣拱龕で，保存もたいへんによい。全面の朱色もよく保存されてゐる。三間に三尊を配し，楣拱額(Rub. IV B)は，屏風ををりたゝんだやうな意匠，その一々の框に坐佛を配してゐる。拱額のしたは，弧狀にしぼった幕で，それにかさねて，瓔珞をもった比丘の列像がある。楣拱のうへ，左右にも合掌の供養者たちがたち，そのうへに三角の垂飾帶がある。たゞし，寶壇には，なにも彫られてゐない。(像高1.00 m)

Pl. 69. 第五A洞 東壁 楣拱龕 交脚像菩薩

Pl. 70 A,B. 第五A洞 東壁 楣拱龕 頭部

痩身ではあるが，肉體のさばきは，かなりよくあらはされてゐる。その點，龍門の諸像と，いさゝかちがったものがみられる。下裳は脚に密著し，そのすそは臺座にたれて，左右にひろがり，するどい先端にをはってゐる。天衣は，兩肩をおほひ，まへで交叉する。そのうへ，胸には平板の頸かざりがあり，また玉をつらねた頸かざりがある。手は右をあげ，左でうけた式であるが，おしいことに後者をうしなってゐる。顏つきはやさしいが，よくとゝのって威嚴がある。目はふくれたうへに，一本の刻線をほどこすのみ，すこぶる簡明な表現である。寶冠やゝたかく，三角形を三面におく式であるが，正面は坐佛の光背になり，そのうへに，新月形をのせてゐる。三角形のあひだにはパルメットの意匠をいれ，簡素ながらすこぶる高雅である。

足は大きい，指もながい。兩足をうけて，上身をあらはした地母神がゐる。天衣をつけ，寶冠をつけ，天人形である。地母神の左右に，一對の獅子がうづくまり，大きな口をひらいてゐるのは，ものすごいかぎりである。(像高1.00 m)

Pl. 71 A. 第五A洞 東壁 楣拱龕 右脇侍

B. 第五A洞 東壁 楣拱龕 左脇侍

右脇侍は，左手に香爐をさゝげ，右手を胸においてゐる。左脇侍は右手を胸に，左手を股にあてゝゐる。どちらも，天衣と下裳が，ほゞ全身をおほひ，交叉する天衣に大環をはめてゐる。足は大きく左右にふんばり，顏は簡明で，三角飾に新月形をのせた寶冠をいたゞく。光背は寶珠形の頭光だが，やゝながてである。光背尖頂の左右に，それぞれ，二人の合掌供養者がゐる。

Pl. 72. 第五A洞 東壁 楣拱龕 楣拱額

こゝにはをりたゝみ式の意匠をもった楣拱額がある。さうして，その突出した正面にあたるところに，坐佛の像があり，つごう九體をかぞへる。まづ，まんなかをみると，そこにはすわった佛像が方形のうちにある。この方形はあたかも突出してゐるかのごとく，さうして，左右の側面はあたかもおくまってゐるかのごとく，なゝめにはいってゐる。これから右の方は坐佛のある方形が，やゝ右方に突出してみえるやうに，側面がなゝめうちにあらはされる。また，これより左方は，やゝ左方に突出してみえるやうに，側面がなゝめうちにあらはされる。これが，いかなる意匠からでたかわからぬが，バルコニィの突出をこのやうにあらはしたものがガンダァラ彫刻のうちにあり，[1] またバァミヤァンの壁畫[2]やキジィルの壁畫[3]にあり，また敦煌の壁畫[4]にもあるから，さういふ意匠から脫化したものかとおもふ。

佛像は，目鼻をつくるのみで，實に簡明な彫像である。したの瓔珞をさゝげた比丘たちの像も，おなじく簡明な彫刻である。

[1] A. Foucher, *L'art Gréco-bouddhique du Gandhāra*, Paris 1905, Fig. 100.

[2] J. Hackin, *Nouvelles recherches archéologiques à Bāmiyān* (Mémoire de la délégation archéologique Française en Afghanistan, III) Paris 1933, Pl. XVI.

[3] A. Grünwedel, *Alt-Kutscha*, Berlin 1920, Pl. I－VIII.

[4] P. Pelliot, *Touen-houang*, Tome III, Paris 1920, Pl. CLXXIX, CLXXXVI.

Pl. 73. 第五A洞 西壁 尖拱龕

東壁に應ずる坐佛尖拱龕である。おしいことに本尊は頭をうしなってゐる。右手は擧手，五指をのばした形式で，左

手はまへにたれ，第三指と第四指とををりまげてゐる。衣端をにぎってゐない。これも，あたらしい佛の形式で，いまはうしなはれてゐるが，この石窟の本尊も，おそらく衣端をもたぬ形式であったらうとおもふ。階段のある衣文はよく全身をおほひ，蓮座，さらに方壇をもおほうて下裳がたれさがってゐる。その「かけも」は，大きく，ひじゃうに整然としてゐる。

左右は，侏儒にさゝへられた脇侍，そのうへに文殊と維摩の像がある。尖拱額には，七佛の坐像があり，拱端にはふりかへった獸形がある。さらに拱額のうへは合掌高髻の供養者たちとなり，最上は三角形の垂飾である。寶壇には，たゞ博山爐をさしあげた侏儒がみとめられる。東壁にくらべると，全體として，やゝ製作がおちるやうである。(像高 0.75 m)

Pl. 74 A,B. 第五A洞 西壁 尖拱龕 脇侍

右脇侍は左手をあげ，まるいものをさゝげてゐる。寶珠 cintāmaṇi であらうか。右手はたれて衣端をにぎってゐる。左脇侍は，右手を胸におくのみで，左手はさげて衣端をにぎってゐる。寶冠は無裝飾，天衣にはひだがあるが，下裳にはひだがない。足下に，ひろい板のやうなものがあり，これをさしあげて，はだかの侏儒が手足をひろげてゐる。

Pl. 75 A. 第五A洞 西壁 尖拱龕 文殊像

B. 第五A洞 西壁 尖拱龕 維摩像

A. これは坐佛龕の上部，拱端獸形の右わきである。正面むき，寶壇に坐す菩薩像である。たゞ拳手形で，左手も第三指以下ををりまげ，第二指をのばし，なにももってゐない。これだけでは，なに像かあきらかでないが，反對がはに維摩像があるので，文殊像とかんがへられる。「かけも」は大きく，寶壇にかゝってゐる。

B. こゝには，維摩居士 Vimalakīrti の像が，こまかくあらはされてゐる。まづ帷幕をたれた牀帳のうちである。それに蓮座をつくり，獸脚の几をよこたへてゐる。きものには，帶をしめ，背に襖衣をひっかけてゐる。すそは大きくたれて蓮座をおほひ，かけもの形式をとる。右手には，大きな麈尾をもってゐる。麈尾は，もちろん蚊虻をおふものである。佛典では拂子 vyajana といひ，馬尾，旄尾をもちひ，その制は脇侍菩薩のもちもの(本書，第十卷，Pl. 62)にみられる。麈尾は，それと制を異にし，麈，すなはち四不像 Elaphurus davidianusの尾でつくられ，扇のごとくである。正倉院にその遺品[1]があり，けだし中國の制にもとづくものであらう。『晉書』卷四三に，王充の從弟，王衍の傳があり，それには「たゞ老莊を談ずるを事とし，つねに玉柄の麈尾をとる，手と同色なり」と，清談貴族の風姿が，そのまゝ維摩居士のすがたにうつされたのである。

こゝには，頭をうしなったが，拱額上の坐佛がみえ，また，そのうへの合掌跪坐天人がみられる。これは破損がほとんどなく，作もすぐれてゐる。また，その左わきにみえる菩薩頭と比丘のすがたは，北壁本尊の右脇侍(Pl. 64 A)である。

[1] 『正倉院御物圖錄』，第十一輯，東京 1938年刊，Fig. 42.

Pl. 76. 第五A洞 天井

天井は格天井，まんなかに蓮華文 (Rub. III A) がある。その蓮華の中心まで，北壁の本尊光背が，のびあがってゐる。それで，まはりに八つの格間がみえるが，各間に一人づゝの飛天がゐる。それらは，みな奏樂の天人であって，西北隅よりあげると，螺貝，竪笛，排管(篥)，横笛，腰鼓，鐃鈸(?)，太鼓と撥である。つまり，東北隅の二人は，共同して太鼓をうってゐるのである。(東西長 1.65 m)

Pl. 77 A. 第五A洞 天井 東北隅

B. 第五A洞 天井 西北隅

A. この二間には，太鼓をもつ飛天と，その撥をもつ飛天とがむかひあってゐる。二人で太鼓をうってゐるのである。どちらも上身をおこし，直立し，しかも下腹部以下を水平にをりまげてゐる。股をのばし，膝をつよくをり，そこに下裳の大反轉をつくり，つよく飛翔するいきほひをしめすのである。顔つきは，いたって平明である。

B. 一は螺貝をふく飛天，つぎは竪笛をふく飛天，どちらもほゞおなじ姿勢で上體をおこし，左股をのばし，右股をまげ，膝もつよくまげてゐる。下裳のはしは，膝うらよりいきほひよくながれ，いかにも空中を飛翔する體勢である。

Pl. 78 A. 第五A洞 天井 蓮華

B. 第五A洞 南壁 上層 列龕

A. 大きな蓮華は二重になってゐる。そとは複瓣，うちは單瓣で，肉はあまりあつくない。(直徑 0.65 m)

B. 南壁上層に，十個の坐佛列龕があり，その拱門上の三龕をしめす。左右は，胸に衣をまいた式で，衣文は頸にまはる二本の弧線と胸にさがる二本の垂線とよりなる。曇曜五窟の內外では，終末期とおもはれる千佛小龕(本書，第十三卷，Pl. 8, 9, 97, 119-122)によくみる形式である。まんなかは，兩肩からゑりをつくった形式で，右腕にかゝってゐる。ま

た各龕のあひだには，三角垂飾のうへに，小さい坐佛を彫ってゐるのがめづらしい。

Pl. 79. 第五B洞 北壁 本尊坐佛

前者によく似た石窟で，北壁には，龕なしの一光三尊佛がある。顔面はいたんでゐるが，身體つきは堂々とし，體格もA洞本尊坐佛よりがっちりしてゐる。しかし，おなじやうな階段式のひだをもった僧衣で，かけもは膝した，足の上下からたれてゐるが，この方はやゝ幅がせまく，すそのさばきがほとんど水平にそろひ，いくらか古式である。手は，こはれてゐるが，おなじやうに擧手と垂手のかたちで，衣端をにぎらなかったものとおもふ。

擧身先，頭光をもつが，火焰形はみなちかごろの彩色である。なにぶん，せまい室なので，右脇侍はうつってゐるが，左脇侍は，このとほりみえない。(像高 1.25 m)

Pl. 80. 第五B洞 北壁 右脇侍

すらりとたった痩身の脇侍である。大きなまるい座をふんまへて，力づよく立ってゐる。下裳は大きくたれ，天衣はそのまへに交叉してゐる。身體を，すこしひねり，すこし右脚をうかしてゐるやうにみえる。胸にあげた手も，腰にあてた手も，指をつよくをりまげて異狀である。顔は，ほっそりしてゐるが，しっかりして氣品がある。寶珠光背はいたってほそく，木葉形といへる。

むかって左手にみえるのは，みな西壁の諸像である。(像高 0.75 m)

Pl. 81A. 第五B洞 南壁 東上部 普賢像

B. 第五B洞 南壁 西下部 儒童本生像

A. これは出家踰城の騎馬像に對する象にのった像である。鼻をたれ佇立する象に，よこのりして，正面をむいた像である。おしいことは顔面のこはれてゐる點である。しあげられてゐないのか，鑿あとをのこした，おほまかな彫法である。(像高 0.30 m)

B. 門口のわきにある。アショカ因緣の釋迦像Śākyamuni Buddha に對する定光佛 Dīpaṃkara Buddha であらう。したに，あさい彫りであるが，合掌跪坐した儒童 māṇava がみられる。その頭髮は，ながくのびて，佛の足下にある。佛は圓座のうへにすっくとたち，ないめうちにむかってゐる。やや痩身で，衣は衣端をとがらしつゝ垂下して，全身をつゝんでゐる。とがった擧身光は素文である。(像高 0.55 m)

Pl. 82. 第五B洞 東壁 楣拱龕

これも，A洞東壁によく似た交脚楣拱龕であるが，作はすこしおとってゐる。楣拱額はおなじやうなをりたゝみ式の意匠で，そのうちにあさい彫りで坐佛があらはされてゐる。拱額のしたに，瓔珞をもった小像がならぶ。ほとんど頭部をうしなふが，化生であるにちがひない。拱額のうへには，合掌の供養者がたくさんゐる。合計十八人，ほとんど，みな僧形である。

本尊菩薩は，頭部をうしなふが，手は擧手形と垂手形である。後者は第三指，第四指ををり，その他をのばしてゐるらしい。衣文は簡素で，天衣の交叉點に大環がみとめられる。足下に地母神があり，左右に獅子がゐるが，いづれも摩滅がひどい。たゞ，獅子の後脚をあらはし，全身側面がみえてゐるのがめづらしい。左右の脇侍も，作ゆき本尊にかなひ，ややゆったりした身體つき，そのうへの飛天も，わりにまるまるとしてゐる。

さらに最上層には，ひだをとった帷幕と，三角垂飾がみられる。これは南壁，西壁にもまはってゐるのであらう。(像高 0.73 m)

Pl. 83. 第五B洞 西壁 尖拱龕

これもA洞西壁に，よく一致する。本尊坐佛は頭，兩手をうしなふが，全身をおほひ，寶壇にたれさがる衣裳はうつくしい。左右には，合掌の菩薩がたち，そのうへには文殊と維摩の對問像がある。拱額の坐佛は，みな頭部をうしなふが，七體あり，拱端には獸形をみる。拱額よりうへは，みな合掌の高髻像で，總數十九人である。(像高 0.58 m)

Pl. 84A. 第五B洞 西壁 尖拱龕 文殊像

B. 第五B洞 西壁 尖拱龕 維摩像

A. 正面正座の文殊菩薩 Mañjuśrī である。頭部をうしなひ，衣文は略されてゐる。頭上には，帷幕をつくってゐる。

B. ないめに坐した維摩居士 Vimalakīrti である。いたって簡素なつくりであるが，手には麈尾があり，わきには獸脚の几があり，背には襖衣がみとめられる。頭上に帷幕のあることは，文殊像におなじである。

拱端の獸形は，この圖版でよくうかゞはれる。

Pl. 85A. 第五B洞 天井

B. 第五B洞 天井 西部飛天

A. 北壁の本尊光背が天井の中心にまであがること，周壁

最上層に三角垂飾とひだのある帷幕をめぐらすことが，これでよくわかる。天井のまんなかには蓮華文がある。一重の複瓣蓮華で，まわりに三重の圓圈がある。左右，つまり東と西には，それぞれ二體づゝの飛天がある。身體を相よせながら，顔は反對の方にむかってゐる。(東西長 1.18 m)

B. 西がはの二體である。上身をおこしながら，股をよこたへてゐるのと，一つの股をよこにしながらも，他の股をつよくをりまげてゐるのと，二體である。膝をつよくをりまげて足がみえず，そのあたりに下裳のすそを大きくひるがへしてゐることは，みな飛勢をあらはす工夫であらう。手はみな菱形にみえるのは，なにか蓮華のつぼみのやうなものをもってゐるためであらうか。

Pl. 86 A. 第五洞 外壁 佛龕 a

B. 第五洞 外壁 佛龕 b

C. 第五洞 外壁 佛龕 c

A. 樓閣第三層の西わきにある佛龕である。三尊の坐佛龕で，龕内一面に火焔の光背がある。頭光は，C字形パルメットつなぎの唐草文と蓮華文からなる。身光内區に坐佛帶があり，かんたんな肩光がある。いま，本尊はすっかり泥でつくられてゐる。(像高 1.74 m)

B. 樓閣第三層東わきにある。三尊坐佛龕であるが，脇侍は，浮彫の比丘像である。身光外緣には火焔があり，内區には飛天帶があり，肩光もある。頭光には，たゞ大きな蓮華文があり，中心は無地である。たゞ頭部はよくのこり，第五，第六洞の代表的な佛頭のひとつである。眉がうつくしくながく，眼はいたってほそい。おしいことに，舉手の右手はなくなってゐるが，まへにだし衣端をとる左手は，實によくのこってゐる。(像高 1.66 m)

C. 樓閣第四層東わきにある坐佛龕で，光背は，とくにいたんでゐる。體軀もすっかりなく，泥の修補であるが，頭部はよくのこり，佛龕とともに，代表的な作品である。おそらく，これらは，たがひに照應させてつくったものであらう。(像高 1.80 m)

Pl. 87 A. 第五E洞 東壁 尖拱龕

B. 第五D洞 西壁 右脇侍

A. 第五洞のうへにでると，C洞からI洞にいたる七洞がある。こゝにあげたE洞の東壁は，佛龕のふかいのが，特色である。その點，龍門の魏字洞(第十七洞)[1]に似てゐる。龕わきに一列小龕をならべたところも魏字洞に一致する。完好な尖拱龕で，拱額には五佛の列坐像があり，拱端には虎形の獸がある。左右には，天蓋のもとに脇侍菩薩がたち，そのうへの群集には，天人と僧形とがある。彫法は適確で，優秀である。(洞高 2.30 m)

B. これはE洞の西にあるD洞である。西壁の右脇侍は香爐を手にしてたってゐるが，作ゆきはE洞によく似てゐる。たぶん第五A洞と前後してつくられたものであらう。(洞高 2.70 m)

1 水野，長廣，『龍門石窟の研究』，Fig. 63, Pl. 48.

Pl. 88 A. 第五F洞 西壁 楣拱龕

B. 第五F洞 西壁 楣拱龕 拱額

小さい，たかさ 1.63 m の石窟である。西壁の本尊は倚坐の佛像である。右端はかけてゐるが，左右に，菩薩像と力士像とが一對づゝあったらしい。そのまはりに，また，多數の供養者たちがゐるが，いま完存する左半が，僧形五體であるのをみると，双方で十體となり，十大弟子のつもりかも知れない。

拱額は，例のごとく折りたゝみ式の意匠で，そのうへに三角形と圓形よりなる屋根かざりがあるのはめづらしい。また，このうへに，二體の飛天があひむかひ，その左右に維摩 Vimalakīrti と文殊 Mañjuśrī の像が相對してゐる。組合せのうへにかなりの，創意がみとめられるとともに，彫法もすぐれてゐる。(洞高 1.65 m)